

<研究ノート>

大学新生を対象とした アクティヴ・ラーニングとしての「感性教育」の試み

小林 隆 児

“Sensibility Education” as Active Learning for Freshmen of University

Ryuji Kobayashi

この数年、私は自ら開発した「感性教育」の効果を検証してきた。そのなかで「感性教育」での最大の目的である自己理解を通じた他者理解が深まるためには、少人数での対話が不可欠であることが明らかとなった。そこで今回は大学入学直後の学部新生21名（男女比：6/15）を対象に、対話を加味した「感性教育」を試みた。実施した回数は90分7コマ。最初に、ある教材を用いて「アクティヴ・ラーニング」とは何かを考えてもらった。その後、「感性教育」を実施して、各自自分の感想を発表し合い、他者の発言を聞くなかでどのような感想を抱いたかを自由に述べてもらった。時間の制約から対話の時間はさほどとることはできなかったが、学生は自分の感じたことを自由に述べ合い、相互に刺激を受けるといふ学びは、これまでほとんど体験したことはなく、全員が肯定的な評価を下した。その内容を検討すると、とりわけ印象的であったのは、彼ら自身の内面への新たな気づきが大きかったことである。以上より、「感性教育」は「アクティヴ・ラーニング」すなわち「主体的・対話的で深い学び」に相応しいものであることが確認された。

はじめに

この数年間、私は、大学の大学院生および学部生、さらには社会人（対人援助を生業とする職業人）を対象に「感性教育」を試み、その成果を検証してきた（小林、2017a、2017b、2017c、2018a、2018b）。その際、少人数を対象とし、

対話を重視した手法を大切にしてきたが（小林、2017a、2017b、2018a）、大人数での可能性についても、とくに学部生を対象に試みてきた（小林、2018b）。その過程で、私が最終目標とする自己理解を深めるためには、対話を重視した手法が不可欠であることを実感した（小林、2018b）。ただし、その前段階として、大学生、そのなかでもとくに入学直後の学部生を対象に、同様の試みを実施することは、臨床教育の初期体験として一定程度の意義があるのではないかと考えた。

さらに、今回の試みを後押ししたのが、「感性教育」を、昨今教育現場でも注目を浴びているアクティヴ・ラーニングとして位置付けることができるのではないかとの思いであった。その直接的契機となったのは、2017（平成29）年11月3日、ステーションコンファレンス東京（東京都千代田区丸の内、サピアタワー）で開催した西南学院講座 in Tokyo「アクティヴ・ラーニングの目指すもの—『深い学び』と『感性を磨く』〈臨床と哲学のあいだ Part 4〉」であった。そこで講師の一人として招聘したのが藤井千春氏（教育哲学者、早稲田大学教育・総合科学学術院教授）であった。氏は「子どもが『深い学び』を遂げるために—『この子』の意味世界の生成・発展を読む—」（藤井、2017）と題した講演を行ったが、その内容を聞いて、私自身の講演「臨床家の感性を磨く」（小林、2017）と深く通底するものを感じ取ったからである。

1. 研究目的

本学に着任した翌（2013）年の6年前から、私は毎年全国の対人援助の専門職者を対象に、西南学院講座 in Tokyo を定期的で開催してきた。そのなかで1年前、「アクティヴ・ラーニングの本質」をテーマに講座を実施した。そこでの議論から、私は自分の試みている「感性教育」はまさに「アクティヴ・ラーニング」そのものとして位置付けることができるとの思いを強くした（藤井・小林ら、2017）。

何事でも最初が肝心であることから、今回は、大学に入学直後の学生を対象にこれまでの方法に準拠した「感性教育」を実施し、その手ごたえを確かめたいと考えた。

本学の私が所属する人間科学部社会福祉学科では、前期に、1年生を対象に必修科目の一つとして「基礎演習」(1コマ90分、15回)が設定されている。社会福祉へのオリエンテーションとして位置付けられる科目であるが、2年に1回、各教員(隔年度、およそ7、8名)が担当し、およそ20名前後の学生を対象として同一時間帯で開講されている。

そこで私は、自分が担当した(2018)年度に、以下に述べる方法で、入学直後の学生を対象に「感性教育」を実施した。そのねらいは、昨今教育現場でも注目を浴びているアクティヴ・ラーニングとして「感性教育」を位置付けることができるのではないかとの思いであった。

2. 研究方法

「基礎演習」は前期のコマ数15回のうち、1年生全体を対象とした講義の時間帯が全体の4コマ(①ボランティア活動、②大学生活、③海外福祉実習、④キャリアデザイン)を占めている。その他のコマは20名前後の小グループでの活動に充てられているが、オリエンテーションの一環として、学生生活のオリエンテーション、図書館の利用、車椅子の理解と実践などに4コマが充てられている。よって私が独自に考案した「感性教育」として実施したのは計7コマであった。以下、その内容を記載する。

(1) 第1回

まず全員の自己紹介に始まり、この基礎演習で私が何を試みようと考えているかを説明した。その後、資料として藤井千春論文「子どもが『深い学び』を遂げるために—『この子』の意味世界の生成・発展を読む—」(藤井、2017)を配布し、その感想を纏めることを宿題(課題1)として課した。

なお、ここで藤井論文の概略と、これを資料として選んだ理由は以下の通りである。

今、わが国でも教育の世界で「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」が急務となっている。しかし、その意味するところは、従来の単に学習活動の

形態を、教師の講義中心から学習者の活動中心に転換するのではない。

「新しい時代に必要となる資質・能力」の育成とは、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」、「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」を達成することであり、そのためには「主体的・対話的で深い学び」が求められている。

では「主体的・対話的で深い学び」とは何か。それは以下の諸点にあるという。①「主体的な学び」は、自分の言葉で語ること、②「対話的な学び」は、互いに分かり合おうと努力すること、③「深い学び」は、成長する自分という意識が形成されること、である。

そこで教師（教員）には何が求められるか。それは「表現の根と芽を読む」ことだという。具体的には、①子どもの表現の根底にあるものとその発展の可能性を常に考え、②暴投や変化球への対応を工夫すること、そのためには、③（生徒や学生の）本音は細部に宿る、ということをおぼわすはならないという。わかりやすくいえば、生徒の何気無いつぶやきや唐突な発言を、礼儀に反するものとして排除することなく、そこに生徒の本音が隠されているゆえ、教師はそれに対する感受力を磨くことが重要だという。

以上の藤井氏の主張を読んで、私は自分自身の臨床感覚と極めて同質のものを掴み取った。それは何かと言えば、患者の本音（無意識の心の動き）は、ほんの些細なからだの動きや何気無いつぶやきや振る舞いに現れているゆえ、それを見逃さず、面接（教育）では丁寧に扱うことが大切であるということである。藤井氏が述べている「感受力」は私のいう「感性」とほぼ同義といってもよい。

（2）第2回（1週間後）

2つのグループ（11名、10名）に分かれて、各々にTA（Teaching Assistant；学部4年生）1名と筆者（11名を担当）が加わって司会進行役を担い、各自に課題1を発表してもらった。その際、司会（とくに筆者）は発表内容がより明確になるための質問を随時行うように努めた。

各自の発表を聞いた後、課題2として、以下の2点について、自由にレポートとして纏めるように宿題として課した。すなわち、「①グループで全員の発表を聞いて、どのような感想を持ったか。感じたこと、気づいたことなどを自由にまとめてください」「②受け身的学びを変えるために自分はどうしたらよいか」である。

(3) 第3回 (この回のみ2週間後)

前回と同様に、課題2について、2つのグループに分かれて発表してもらった。この際、司会は前回とは別のグループを担当することで全体を把握するように努めた。

(4) 第4回 (1週間後)

これまで2回、アクティヴ・ラーニングについて資料をもとに各自の考えをまとめて、互いに発表してもらったが、この回から、「感性教育」の一環として、実際の母子交流場面を供覧して、その母子関係をどのように観察したらよいか、について考えてもらうことにした。

具体的な内容と進め方については、小林(2018b)の方法に準じた。

新奇場面法(SSP)で記録された1歳0ヶ月の男児とその母親の交流場面を供覧し、「この母子関係の特徴について、タイトルを考え、その根拠を述べなさい」との宿題(課題3)を課した。供覧した事例¹については、以下に記し内容の予備的情報を与えた。なお、引用文献(脚注1)も末尾に付記した。

●1歳0ヶ月 男児

知的発達水準 境界域精神遅滞(DQ80)

主訴 泣いてばかりであやしても笑わない、抱きづらく抱くとのけぞる、視線が合わない、人見知りが激しく人を寄せつけない。

¹ 拙著『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』事例2(pp.55-59)

発達歴 仮死、吸引分娩。新生児期、授乳中のけぞったり母の手をふりはらう、視線が合わないなど母子間において子がしっとり甘えるといった関係が乏しかった。子はよく泣き、母乳を飲んだあとも泣き続けることが多かった。あやしても笑わない、抱いてもすぐにのけぞるので母は疲れやすかった。生後5ヶ月、指しゃぶりが始まる。指しゃぶりによって泣き叫ぶことが減った。子は、抱かれることを嫌がり、仰け反ってすぐに降りていた。そして、一人で横になって指しゃぶりをして寝てしまうことも少なくなかった。夜は30分から1時間おきに起きては激しく泣く。子どもの多い場所へ連れて行くと嫌がって泣く。真似をまったくしようとしなない、人見知りが激しく、周囲への警戒心が強い。初回面接で、母親は、「この子を赤ちゃんらしく感じたことがない」と語っているのが印象的である。

SSP にみられる母子関係の概要² (省略)

(5) 第5回 (1週間後)

課題3について、今回は一つのグループとして、全員に発表してもらった。その後、再度同一事例を供覧し、「全員の感想を聞いたのち、自分のそれと比較して、どのような感想を持ったか、何に気づいたか、自由にまとめるように」宿題 (課題4) として課した。

(6) 第6回 (1週間後)

全員同じグループで各自課題4について報告してもらった。その後、以下の課題「ある学生 (A子、学部2年) の感想文を紹介します。ただし、これが正解だということではありません。自分のそれと比較したとき、なぜ違いが生まれたのか、自分で気づいたことを中心に、感じ考えたことを率直に述べてください。自分の観察の特徴に気づくことが大切であって、けっして正しい答えを要求しているわけではありません。自分をより深く理解することが最大の目的です。」を宿題 (課題5) として課した。

² 小林 (2018b, pp.283-284) に記載している。それを参照してほしい。

なお、紹介したある学生の感想文は以下の内容である。

■ A子（学部2年）の感想

子どもの中途半端な甘え方が何よりも私は気になった。子どもは、母親一人でボール遊びをしているときに声をかけられたり、一緒に遊ぼうと近づいてこられたりしてもほとんど反応しない。しかし、遊んでいる途中で急に両手を上に伸ばして母親に抱っこを求めたり、母親がいなくなったことに気づくと急に不安になって大声で泣き出したりしている。母親が近くにいる時は半ば母親を無視するような素っ気ない態度をとっているのに、いざ母親がいなくなってしまうと、それまでとは打って変わって心細そうな様子になるのが非常に不思議だったし、印象的であった。

わたしがこのビデオを観てこの子の心情を想像すると、以下のようになった。この子は普段母親がそばにいる時は、「僕はお母さんが近くにいなくても大丈夫だ」と母親に対して意地を張っている。しかし本当は、母親がそばにいないと不安でたまらない。そのため、母親が自分から離れて行くと抱っこを求めたり、母親が見えなくなってしまったりすると、泣き叫んでしまう。その後母親が自分を抱きしめてくれると安心するし嬉しいけれど、甘えたり泣いたりしてしまった自分が恥ずかしく、なんだかきまりが悪いため、母親とうまく目を合わせられなかったり、母親との体の密な接触を避けようとしていたりしているのではないだろうか。ボールや指をよく咥えたり吸ったりする仕草は、この子が母親に対して上手く甘えられないストレスを表しているのではないかと思った。

また、子どもに対して、母親がことあるごとにしきりに頭を撫でていることが私はとても気になった。自分が出て行ってしまい寂しい思いをさせてしまっでごめんね、とあやす「よしよし」は理解できるのだが、単に遊んでいる子どもの頭を何度も撫でる母親には少し違和感を抱かざるを得なかった。普段から仲の良い親子がコミュニケーションの一環として子どもを「よしよし」するのであれば特に疑問を感じないのだが、この親子の間には身体的な距離だけではなく精神的な距離もあるように感じたので、あのどこか不自然でぎこちない「よしよし」は強く印象に残っている。おそらくだが、この母親はどうか子

どもと上手く付き合いたい、子どもに懐いてほしいと強く願う一方、子どもとの距離が縮まらない現実に対する焦りから、あのような行為をしたのだろう。

お互いの気持ちを分かり合えないまますれちがってしまっている二人の様子は、見ていて切なかったし、もどかしかった。どのような経緯で現在のような親子関係に至ったのか私には分からないが、まだ1歳になったばかりの子どもが母親に対してあのような態度をとる様子は今まで目にしたことがないので、少し驚かされた。もしかしたら以前、構ってほしい時に母親に十分に相手をしてもらえなかったり、寂しい思いをさせられてしまったりしたことがあったのかもしれない。どのような理由があるにせよ、今後、親子間で長いスパンで二人の距離を上手く縮めて行く必要があるだろう。

【筆者がこの感想文を見本に選んだ理由】³ (省略)

(7) 第7回 (1週間後) 最終回

課題5について各自の発表をしてもらった後、私は3回目の事例供覧をしながら、母子関係の特徴と注目してほしい点に焦点を当てながら解説した。

つぎに、私が一昨年執筆した小書『臨床力を高めるための感性教育』(小林、2017a)を配布した上で、「『臨床力を高めるための感性教育』を読んだ上で、つぎの課題(課題6)に対して、自分の体験の意味を率直に述べてください。」との宿題を課した。

「私(教員:小林)の基礎演習では、「主体的・能動的な学び」を目指して、私なりの試みを行ってきました。おそらくはこれまでの高校までの学校生活での学びとは大きく異なったものを体験されたことでしょう。そこで、皆さんにとって、今回のこの試みがどのような体験となったのか、率直に語っていただきたいと願っております。率直に語っていただくことが大切ですので、感じたこと、思ったことなどを自由に、大いに語っていただきたいと思います。」

翌週、課題レポートを回収。コマ数の関係から最終課題の感想については全体での共有化を図ることができなかった。

³ 小林(2018b, p.286)に記載しているので、それを参照してほしい。

3. 研究対象

当該年度の学科1年の学生（おおむね18～19歳）。必修科目「基礎演習」を履修した学生で、私の担当グループは計21名（男女比＝6/15）である（表1）。今回は量的な統計的検討を行わないゆえ、一部レポート未提出の学生についても対象に加えた。

表1：対象

性別	男性	女性	計
対象数	6	15	21
%	28.6	71.4	100

4. 倫理的配慮

供覧する録画ビデオについては、母子ユニットで実際に臨床を実施した際に、両親に対して本録画データを研究と教育に用いることについて文書で同意を得たものである。

学部生にはビデオ供覧に際して、その内容の録画と録音をしないこと、ならびに患者に関する情報の守秘義務を遵守することを文書にて誓約してもらった。対象となった学生は現実に教育現場で実習教育を経験し、そこでは現場の職員に準じる資格で実習に従事し、その際守秘義務が課せられているという理由に依っている。

今回の結果については学生の匿名性を十分に配慮し、任意に番号を割り当てた。特定化できる恐れのある箇所は削除した。

5. 研究結果

(1) アクティヴ・ラーニングをどのように理解したか（課題1）

すべての学生が異口同音に、これまで「アクティヴ・ラーニング」という言葉は耳にしたことはあると述べ、数名の学生は実際高校生時代に「アクティヴ・ラーニング」と称した学習を体験したこともあると述べている。しかし、その内実はお仕着せの感が強く、教師もそのやり方に習熟しておらず、真の意味でアクティヴ・ラーニングといえる代物ではなかったとする発言があった。

そして、藤井論文について、全員肯定的に評価はしていたが、自身の体験を踏まえて、深く考察した学生はほとんどいなかった。ひとつ典型例を以下に紹介する。なお、冒頭の鉤括弧内は学生自身がつけた感想文のタイトルである。

(09 女性)「可能性を開く学び」

私はこの資料を読むまで、「アクティヴ・ラーニング」というものが英語の授業のような「学習者が動く」という学習活動の形態であると理解していた。私は「アクティヴ・ラーニング」が「主体的・対話的な深い学び」として、自分の個性的な能力を発揮して、協同的な活動に参加・貢献し、そのようにして世界のなかで世界の「人・もの・こと」と相互作用しつつ生きることのできる「資質・力」を、学びの能力の経験を積み重ねることによって育成する学習であることを知って、私はまったくの勘違いをしていたと思った。

自分の小学校・中学校・高校時代を振り返って、自分がどのように「主体的・対話的で深い学び」をしてきたかを考えると、一番に思い当たるのは、長期休暇のときに課せられた理科の自由研究である。自分の身近にある様々な不思議、たとえば、どうして川にある石は上流と下流で石の大きさやかたちが違うのか、などを自らで問い、調べ、分析・整理して、それを公用紙にまとめて発信するという一連の流れは、「アクティヴ・ラーニング」そのものであると思う。

しかし、中学生、高校生になり受験のための勉強をするにつれて、授業では基本的に学校の先生が教えてくれたことやテクニックを暗記して、テストで暗記したものを記述するという流れで、自分独自の問題意識が生まれにくかったように思う。

高校時代は自分が理科系に進むか、文系に進むかで悩んだり、自分がどういう大学に行って何をするのかということ迷ったり、人生に関わる大きな選択をしなくてはならない。でも、その人がそのような選択をするときに、自分の興味や関心のある分野がまったくその人自身でもわからないときがある。私は、その原因が、その人が自分の将来のことを考えなかったということもあると思うが、自分の興味・関心が何かを発見するチャンスを提供できなかつ

た、現在の教育のあり方にも問題があると思う。学校の授業に討論会を取り入れたりして、もっと「アクティヴ・ラーニング」の勉強法が進んでおれば、自分の興味・関心のあることを発見しやすくなり、「勉強しても将来何の役にも立たない」という子どもが少なくなっていくという効果があると思う。

最後に、「アクティヴ・ラーニング」での、「学びを人生に生かそうとする学びに向かう力・人間性の滋養」、「生きて働く知識・技能の習得」、「道の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」という「新しい時代に必要となる資質・能力」の育成を遂げるという目的は、子どもたちの持っている個性をのび、テストで点数をとるための勉強だけが「学び」ではないことを教えてくれる。正直、社会に出ても小・中・高で習ったことを使う機会は少ないが、「アクティヴ・ラーニング」で得た問題への取り組みがあれば、自分の持っている知識を利用して社会に新たな価値をもたらすことができる。今後「アクティヴ・ラーニング」で教育された子どもたちが、どのような価値を生み出すのか楽しみである。また、私も大学で自分の課題を見つけて挑戦してみたい。

〈コメント〉

「アクティヴ・ラーニング」とはどういうものかをこの資料を通してよく読み込み、理解を深めていることはよく伝わる内容である。しかし、これまでの教育を批判的に振り返りつつ、「アクティヴ・ラーニング」によって「自分の興味・関心のあることを発見し」「自分の持っている知識を利用して社会に新たな価値をもたらすことができる」と楽観的に語っている。資料の主張を丸ごと取り入れて素直にそれに同調して、「『アクティヴ・ラーニング』で今後教育された子どもたちが、どのような価値を生み出すのか楽しみである。また、私も大学で自分の課題を見つけて挑戦してみたい。」などと客観的な立場から「優等生的に」まとめている。このような感想を述べる学生は多い。実に要領の良い、教師から見ればケチのつけようのない内容である。しかし、自分の経験に根ざした本音と思われる内容はほとんど語られておらず、読む者の心に響くものは乏しい。

(2-1) 他の学生の発表を聞いて何を感じ、気づき、考えたか (課題2)

代表的なものをふたつ以下に記載する。

(10 女性) 「各自の感想を聞いて考えたこと」

みんなの感想を聞いて、みんな自分の経験を重ねて書き、とてもうまくまとめている、びっくりしました。みんなが発表するたびに、自分は焦り、自分のレポートの感想が的外れではないかと思いはじめ、不安になりました。私も感想を書くとき、自分の経験を書いてみようと思ったが、難しく考えてしまい、書いたとしてもこの経験は筆者(小林: 筆者注)の考えと合っていないのではないかと考え、結局あまり書くことができませんでした。

しかし、みんなの感想を聞いて「ああ、こんなことを書けばよかったのか」「こんな経験、私もあったな」といろいろと気づかされました。身近なことを書けばよかったです。また、友達が「個人的なことを書いてしまったので恥ずかしくなりました」と言っているのを聞いて、自分とは逆の学生もいるのだなと思いました。私は個人的な考えや経験を述べることができないからです。自分の率直な意見を書けばよいのに、周りの人がどう受け取るかばかり考えていました。しかし、改めて考えるとそんなことばかり考えていたら、たくさんの意見がでてきません。それぞれの人が持つ考えは異なるのは当たり前だから、どんな意見でも出すことが大事だと思いました。

このように今回のレポート作成を通して、たくさんのことを学ぶことができました。レポートを書いたのは初めてで、みんなどんなふう書いてくるのかわからなかったのが不安でした。今回、みんなの感想を聞いて自分のレポートの改善点がみつかりました。つぎに書くときは今回のみんなの感想から学んだことを意識し、みんなのレポートのよい点は取り入れて書いてみたいと思います。

〈コメント〉

この学生の感想には人前で自分の意見を述べるのがとても恥ずかしいことが率直に述べられていて、好感をもつが、結局最後には「優等生的」に「つぎに書くときは今回のみんなの感想から学んだことを意識し、みんなのレポートのよい点は取り入れて書いてみたいと思います。」と結んでいる。この感想文

を読んで、私がこの学生に一番考えて欲しかったのは、「私は逆に個人的な考えや経験を述べることができない」ことについてであった。数少ない学生が個人的な内容を恥ずかしいといいつつも述べたことに対して、自分がなぜそれを封印してしまったのか、そこに深く踏み込まないと、口では、これからは改善しようと思いますと言いつつ、結局は行動面ではなんら変わらないということがほとんどであるからである。

(2-2) 受身的学びを変えるために自分はどうしたらよいか (課題2)

(16女性)「受身的な学びを変えるためにすべきこと」

一つ目は、授業中にわからないことがあれば、その場で質問することだ。…… (中略) ……

二つ目は、他の学生が先生に当てられているときも、自分が当てられていると思って答えを考えてみることだ。…… (中略) ……

受身的な学びを変えるために自分自身ができることは、まず、主体的に授業に参加し、疑問を持つことだ。授業に対する意識から変えていかなくてはならないと思う。

今まで述べたことを実践すれば、受身的な学びを変えることができるだろう。しかし、それはとても難しいことである。今まで、小・中・高・大学で授業を受けきたが、授業中に手を挙げて質問をする生徒はほとんどいなかった。授業中はしゃべってはいけないと言いつけられていたし、先生の話を遮って自分の意見を言うことも、授業を受けている他の生徒の邪魔になるだろうと考えていた。だから誰も発言しようとせず、わからないことも授業後に聞きに行くことで精一杯だった。よく、「日本人は消極的だ」などと言われるが、それは今まで謙虚さこそ美德とされてきた日本社会全体の考えによるものだと思う。どんなに積極的に授業を受けよう、質問しようと思っても、周りが消極的であれば、なかなかうまくいかない。自分一人が頑張っても、自立してしまい、生きづらくなる。だから、私は社会全体が変わらなければ、受身的な学びを根本的に変えることはできないと考える。

今の日本社会において受身的な学びは当たり前のことだけど、それを少しで

も変えるために、まずは自分自身の授業の受け方を変えていきたい。そして、主体的な学びが当たり前の社会を目指していきたい。

〈コメント〉

頭ではよくわかっている。しかし、いざ実行しようとするとなかなか難しい。その最大の理由が「どんなに積極的に授業を受けよう、質問しようと思っても、周りが消極的であれば、なかなかうまくいかない。自分一人が頑張っても、目立ってしまい、生きづらくなる。」ことであるという。とてもよくわかる内容である。建前として「まずは自分自身の授業の受け方を変えていきたい。そして、主体的な学びが当たり前の社会を目指していきたい。」といった「優等生」的な発言で締めくくっている。今の学生にとっても多い反応である。しかし、残念ながらこの場を無難に過ごすために身につけた处世術であって、しばらくすればここで述べた事も忘却の方に消えてしまうことが危惧される。なぜなら、私はこの6年間、本学での講義を行って来て、講義中に直接質問をした学生には数名しか出会っていないからである。

(3) SSP 事例を観察して母子関係をどのように捉えたか (課題3)

対象学生が母子関係の特徴を示すタイトルとしてつけた内容と、その評価を肯定的か、否定的あるいは両面的か、の二分法で分類して表2に示した。

表2 母子関係の特徴を示すタイトルと母子関係の評価

No.	性別	母子関係の特徴を示すタイトル	母子関係の評価
1	女性	幼児期の自閉症スペクトラム障害 (ASD) の特徴 ～周囲への関心の変化と周囲からの影響～	否定的
2	女性	見えづらい愛情関係	両面的
4	女性	母親への態度の変化	肯定的
5	女性	寂しさと不安が母親を求める	肯定的
6	男性	母とストレンジャーの違い	肯定的
8	女性	親子の絆	肯定的
9	女性	赤ちゃんにとっての母親	肯定的
10	女性	母親と子どもの関係について	肯定的
11	女性	子供の性格と病気との境界	両面的
12	男性	子どもの視点・感じ方	肯定的
13	女性	自分の殻に閉じこもった子	否定的
14	女性	乳幼児期の自閉症スペクトラム	教条的

15	男性	母親に依存した男児	肯定的
16	女性	母子分離のできない子供	肯定的
17	男性	赤ちゃんから見た母親の存在	肯定的
18	女性	(変更前) 一人が良いけど、一人じゃ嫌 (変更後) 甘え方が分からない	両価的
19	女性	見え隠れする信頼関係	肯定的
20	女性	子どもにとっての親とは	肯定的
21	男性	母親が持つ特別な力	肯定的

(注) No.3 (男性) と No.7 (女性) は欠席のためデータなし

肯定的評価の1例

(21 男性) 「母親が持つ特別な力」

まず、プリントを読んでとても印象に残ったことは、初回面接の際に母親が自分の子どもに対して、「この子を赤ちゃんらしく感じたことがない」と語ったと書いてあったことです。実験の映像を見るまでは、何で苦勞してまで生んだ自分の子どもにこんな感情をもつのかなと疑問に思いました。

しかし、映像を見ると自分が思っていた以上に人見知りが激しくとても大きな泣き声で、抱かれると嫌がってのけぞっていました。あんなに大きな泣き声で真夜中に眠たい時間帯に寝たいのに泣かれてしまい寝ることができない。それが一日中、毎日、何ヶ月も続いてしまうと確かに全然しっかりと寝ることはできないし、ストレスになりそうだなと思いました。また、人見知りの強い子の場合親戚や施設など他の人に預けて自分の時間をつくったり、ゆっくり休憩することもできないなと思いました。

だけど、他の人には変えることのできない大変な思いをしているからこそ、今回の親子とストレンジャーとの実験のように、母親が自分の子どもにしか与えることのできない、何かしらの力があるのだろうかと思った。

その根拠として、母親とストレンジャーが一緒にいる環境で赤ちゃんが遊んでいても泣かなかつたのに、母親が室内から退室していなくなったのに気がつくと、赤ちゃんが突然泣き出してしまった。母親が室内にいる際にストレンジャーを怖がって泣かなかつたので、ストレンジャーが怖くて泣いたのではなく、母親が室内からいなくなったことに気がつき、不安になって泣いてしまったのではないかなと思う。また、赤ちゃんが泣いてしまった際に、ストレン

ジャーが部屋にあったおもちゃなどをいろいろと使って泣き止まそうと試みたけど、結局あまり効果がなかったのに対して、母親の際には抱っこをして少し背中をさすってあげるだけで、泣き止み落ち着いてしまった。多分、母親よりもストレンジャーさんの方が仕事にしているぐらいなので、赤ちゃんをあやす技術・経験・知識などはあるはずなのだろうけども、赤ちゃんにとっては、いつもどおりの母親のあやし方のほうが、他の人には与えてあげることのできない、落ち着きや安心感のような特別な力があるのだらうなと思った。

〈コメント〉

子どもが母親と一緒にいるときと、ストレンジャーと一緒にいるときとで比較すると、母親が戻って相手をする途端に泣き止んだところを捉えて、母親の存在の大きさを感じ取っている。残念ながら、この母子間に流れているデリケートで微妙な緊張感を感じ取ることができていない。

否定的評価の1例

(13 女性)「自分の殻に閉じこもった子」

私も、自分のことを人見知りだと自負しているが、ビデオで見た自閉症の子は見知らぬ人だけでなく、母親にまで心を閉ざしているように見えたため、その警戒心の強さにとても驚いた。赤ちゃんが泣くと、母親は何とかしてあやそうとするが全く泣き止まず、抱き上げることも拒否されている姿は見ていて心が痛んだ。自分の子どもなのに愛を受け入れてすらもらえないのはつらいだろうし、どう対応していいか分からず困ってしまうだろう。

赤ちゃんは、どんなに泣いても母親があやせば笑顔になるものだと考えていた。しかし、このビデオの自閉症の子どもは周囲の人だけでなく、母親にまで心を閉ざしている様子であり、本当にひとりぼっちの状態なのだと言った。こちらから寄り添おうとしても拒否する自閉症の子どもに、どのような対応をとっていくべきなのかをこれから学んでいきたい。

〈コメント〉

「この子は自閉症である」、「赤ちゃんはどんなに泣いても母親があやせば笑顔になるものだ」などとする先入観にとらわれてしまい、先入観との違いにた

ただ驚くばかりで、母子関係の様相を素朴な目で観察することが難しくなっているのがよくわかる。

両価的評価の1例

(18 女性) 変更前「一人が良いけど、一人じゃ嫌」

変更後「甘え方が分からない」

子は母親と遊んでいるという風ではなく、一人で遊んでいるように見えた。また、ストレンジャーに抱かれるのはすごく嫌がっていたが、母親に抱かれても、甘えたり、笑ったりはしていなかった。泣いたときも、指しゃぶりをして、自分を落ち着かせ、泣き止んでいた。常に、自分ひとりの世界で生きているようにも見えたが、子はストレンジャーと二人でいるときよりも、一人ぼっちのときのほうが激しく泣いていた。

そこで、初めは、一人でいることが平気なのだろうと思っていたが、甘え方が分からないのではないかと考えが変わった。人見知りな性格で、コミュニケーションの取り方が分からないことに加えて、感情を表に出すことができないのだ。子は、心の中では、甘えたり、笑ったりする感情があるが、それを顔や動作で表すことができないのだ。

〈コメント〉

最初はタイトルを「一人が良いけど、一人じゃ嫌」としていたが、その後変更して「甘え方が分からない」としている。子どもが甘えるのは「甘え方がわかる」からということなのであろうか。「甘え方」は学習して身につけるものなのだろうかとの疑問が湧く。

最初のタイトル「一人が良いけど、一人じゃ嫌」は、この子どもの母親に対する微妙でアンビヴァレントな心理がとてもうまく描写されていてほとんど感心するのだが、残念なことに、学生はなぜかタイトルを「甘え方が分からない」と変更してしまっている。

なぜ変更したのかを想像するに、文字どおりアンビヴァレントな心理を示している「一人が良いけど、一人じゃ嫌」は、この学生にはどうもおさまりが悪かったのであろう。まさにアンビヴァレントな心理そのものだからである。こ

のタイトル変更、この学生のアンビヴァレンスに対する彼女なりの対処法を見てとることができるのではなからうか。

(4) 他の学生の発表を聞いて何を感じ、何に気づき、何を考えたか (課題4)

ここでの学生の気づきは、これまでに私が試みた「感性教育」で学生たちが述べた内容とほとんど同じであった (小林、2018a)。よって、ここでは取り上げることは割愛した。

(5) ある学生 (A子、学部2年) の感想文を読んで、自分の見方についてどのようなことに気づいたか (課題5)

以下、注目すべき内容をいくつか取り上げる。

(05 女性) 「子どもの意地と母親の期待」

子どもが一人で遊んでいた場面で、子どもが母親やストレンジャーに関心を示さなかったのは、子どもの警戒心が強く、心を閉ざしているからだとは思いました。しかし、A子さんは同じ場面を見て、子どもが「意地を張っている」という考えを述べていました。私はまだ1歳の子どもが意地を張るということに違和感を感じたので少し驚きましたが、母親に抱かれると同時に泣き止み、嫌がるようにして降りていった子どもの行動を考えると確かにその通りだと思いました。

また、母親の「この子を赤ちゃんらしく感じたことがない」という言葉がとても印象的だったので、私は子どもの方に問題があると捉えてビデオの子どもの様子を注意深く観察していました。しかし、A子さんは子どもだけでなく母親の行動にも注意を向け、母親の心境を推測していました。さらに、お互いの気持ちがすれ違っている母親と子どもの精神的な距離を読み取り、またそのようになった経緯まで推測していたので驚きました。

ビデオを見る前、私は子どもに何らかの問題があるという先入観を持っていたので、母親の行動の心理まで読み取ろうとしませんでした。しかし、母親は子どもに何らかの期待を込めて行動しており、子どもはその期待に応えようと

する節があるので、このような関係がある限り、子どもだけでなく母親にも注意を向けて推測する必要があると思いました。

〈コメント〉

最初からある先入観をもって観察していたことへの気づきが率直に述べられている。大切な気づきである。

(07 女性) 「正解に安心する自分」

A子さんの感想文と自分の感想文を比較し、違いを考え気づいたことは、私は「他者が認めてくれるような正解を求めている」ということだ。

A子さんの感想文を読んで、同じ着眼点からここまで深く考えることができるのかと驚いた。子どもが一人で遊んでいる、という着眼点は私や他の人にも共通していた。しかし、そこから考察した内容の深さがA子さんとは違っていた。私は、その他の場面での子どもの様子と絡めながら、子どもの心情を想像することが出来ていなかった。

また、A子さんは母親の行動についても考察をしている。私は子どもが何をしているのか、何を考えているのか、何を感じているのか読み取ることに精一杯で、母親は子どもに刺激を与える人、としか見ていなかった。母親の行動に違和感も持たなかった。しかし、A子さんは母親の行動に違和感を抱き、それについて述べている。

それに加え、A子さんは、母親とその子どもの関わり合い方から、どのような経緯で現在のようない親子関係に至ったのか考えていた。また、長いスパンで二人の距離を縮めていく必要性を考えている。私は今、目に見えていることしか考えていなかった。

私とA子さんの感想文を比較したとき、私はいくつかの場面から総合的に考えることが出来ていなかったことが分かった。そして、何か1つに注視しても、1つのことしか読み取ったり、掘り下げたり出来ていないことに気づいた。

この気づきでは、A子さんの感想文と比較して、自分の足りなかったことにしか目を向けられていない。この比較後の感想を書いた後、課題文の「けっして正しい答えを要求しているわけではありません」という箇所をもう一度読ん

で、自分が何を身につければ正解に近づけるのか、という点でしか考えていなかったことに気づいた。自分の観察の特徴として気づくことができたのは、この点だけである。他に何を特徴として挙げられるだろうか、と考えても分からない。

また、「正解を求めている」という点について考えたとき、自分は不正解になりそうなものは、自然と、無意識に排除しているのではないかと思い、怖くなった。今はこれに気づくことができただけでもいいのだろうか。

〈コメント〉

この学生が率直に述べている不安は、程度の差こそあれほとんどの学生が共通に抱いているものであると思う。ただそんな自分に気づいて「怖くなった」と述べているところにこの女子学生の不安の強さを感じさせる。それだけ正直だということなのであろうか。

(11 女性)「受動的・能動的な観察」

私が観察したときに持った感想と A 子さんの感想を比べて自分のものと一番違っていると思った点は、子供の様子を細かく観察したのちに、子供のみならず母親についてまで具体的に詳しく想像している点です。自分が書いた感想には見たまま感じたことを抽象的に書き出しただけで、子供の細かい心の機微を読み取ろうとしたり、その心情についてを想像できるまでにはなっていませんでした。A 子さんの感想の中にあつた「遊んでいる途中で急に両手を上に伸ばして母親に抱っこを求めたり、母親がいなくなったことに気づくと急に不安になって大声で泣き出ししたりしている」という部分は前回私が映像を見直して述べた部分とほとんど同じですが、そこから抱いた感想、考察には大きな違いがありました。私はこの部分を観察して、この子供はただ甘え方がわからないのだというふうに考えましたが、A 子さんの感想では、この子供は普段は母親に意地を張っているが母親と離れるとやっぱり不安で、泣いてしまった後母親にあやされると嬉しいけどきまり悪くてまたそっけない態度をとってしまうのではないかという考えが述べられていました。同じ部分を注視しているにもかかわらず、そこからどう考えを広げていくかによってこんなにも違いがあること

に驚かされました。また、母親がしきりに子供の頭をなでていることについても、どうしてそのような行動をとっているのかなど詳細に述べられていました。今回の観察は子供がメインであり、どうしても他へと注意を向けにくいですが、このように広く物事を見ているのが素晴らしいと感じました。それに加えて観察を終えたのち、この親子がどういうことが原因でこうなったのか、関係を改善していくには今後どのようにしていけばよいかというところにまで目を向けられていた点も、私に足りなかったところだろうと思いました。

このようなことから、A子さんが述べている感想は、観察したものから自分なりに大切だと思うところを注視し、その様子をただ述べるだけでなく、どうしてそうなったのか、観察対象は何を考えてそのようなことをしているのかなどを自分の意見としてしっかりと持ち、それを発信できる「能動的な観察」であると考えました。それに対して私は、目に入った情報から受けた印象を自分自身の言葉で発信できておらず、観察対象を見た場合一般的にはどのように捉えられるかをどうしても考えてしまう「受動的な観察」になってしまっていると感じました。受動的なものから能動的な観察へと変えるには、自分の中で物事を整理し言語化できるようになること、想像力を働かせることなどが必要であると思うので、これから物事を観察するときには今回気づけたことを思い出し、活かしていきたいと思います。

〈コメント〉

同じビデオをみんなで見た上で様々な意見を出し合うことによって初めて体験できるであろう、この種の「感性教育」によって、この学生は文字どおり「能動的」な観察を身をもって体験していることが見て取れる。

(6) 今回の「感性教育」をいかに体験したか (課題6)

以下は参加学生全員の感想である。本文のはじめの鈎括弧内のタイトルは学生自身が記載したものである。

(01 女性) 「主体的・能動的な学びの体験」

私たちは基礎演習を通して「主体的・能動的な学び」を体験してきた。いま

までの小・中・高を含む教育の場において、「主体的・能動的な学び」を行うことは全くなかったわけではないが、今回のように追究することはなかった。つまり、基礎演習での「主体的・能動的な学び」が初めての「主体的・能動的学び」の体験といっても過言ではない。

私たちは、初めに「主体的・能動的な学び」についての文章を読んで、それに関するレポートを作成し、グループワークを行った。そこで、私たちはまず、「主体的・能動的な学び」すなわち「アクティヴ・ラーニング」とはどのような学びであるのかを認識し、基礎演習に臨んだ。

私たちは、生まれてから今まで、小・中・高を含む学習のなかで体験してきた学びは、「主体的・能動的な学び」ではなく、大半は「受身的・受動的な学び」であったと思う。今までの学びの中で求められてきたのは、単に「正しいこと」「正解」を導き出すことであり、形式じみたものが多かったように思う。しかし、今回の基礎演習を通して、「学び」というのは単に「正しいこと」「正解」を導き出すことだけではなく、その「正解」に至るまでの過程・プロセスも重要であると思った。これの具体例を挙げるとすれば、学校での試験勉強や受験勉強（特に数学・国語）がこれに当てはまると思う。まず基盤として、基礎知識を身につけることは「主体的・能動的学び」においても必要である。この身につけた基礎知識（公式や語句、単語など）を軸にして、自らの力で「正解」を導き出そうとする。もし、自分の導き出した答えが間違っていたとしても、その間違いを受け入れ、原因を追究し、明確にすることで初めてその人の「学び」となるのだろうと考えた。つまり、「主体的・能動的な学び」は繰り返され、経験として積み重ねられることで、私たちにより高レベルの学びをもたらすのだろうと私は思った。

最後に、今回の基礎演習での「主体的・能動的な学び」が私にとってどのような体験となったのかを考えようと思う。結論を言うと、基礎演習での「主体的・能動的な学び」は私にとって非常に有意義な体験であったと思う。今まで「主体的・能動的な学び」すなわち「アクティヴ・ラーニング」の経験が薄かった私にとって、基礎演習での学びは非常に濃い経験であった。この学びを通して、視野を広く持ち、さらには見たこと・感じ取ったことを言葉にする重要性

を理解することができたと私は思った。

〈コメント〉

「有意義な体験であった」ことは述べられているが、もう少し具体的な内容まで踏み込んでいけば、さらに意義深い内容が明らかになったのではないかと思う。

(02 女性) 「能動的学びへの意識」

私にとって今回の基礎演習は能動的学びへの意識が大きく変わる体験となった。

最も印象に残ったのは最初のレポート提出の体験である。正直に言ってしまうと、自分で書いたレポートを読み上げることはとても苦痛だった。もちろん、アクティヴ・ラーニングの資料を読んだ上でのレポートであるため、その行為が能動的な学びに必要不可欠であることは理解していた。

しかし、やはり恥ずかしさが勝ってしまい、読み上げる際に声が震えてしまった。読み上げた後に、「すみません。思ったことをそのまま書いてしまっ。前に読み上げた人との書いた内容の雰囲気があまりにも違うものでい……」といったことを伝えると、先生から「思ったことをそのまま書くことが感想だよ」と教えていただいた。

この体験は私にとってとても衝撃的なことだった。思ったことをそのまま書くことが感想であるという当たり前なことを頭では理解していたにもかかわらず、無意識に人の感想と自分のそれとを比較し、正しいかどうか気にしていたことを体感したからである。

その後のレポートでは講義の途中でメモをしたりすることで、思ったことをそのまま書くように心がけた。すると、今までの感想文などにはなかった自分の経験などを書いたうえで感想を具体的に書けるようになった。

配布された『臨床力を高めるための感性教育』ではこのように記述されていた。「……あるいは感じたとしてもそれをどのように扱ったらよいかわからない。そんな困惑した状態にあるとき、抽象度の高い言葉を用いることによってその困惑から抜け出すことができるからである。……その結果、生で感じた体

験に蓋をすることになるのだ。」

この文章を見たとき、私は他人から正しいと思われるような感想を書こうとするあまり、個人によってとらえ方が違うような抽象的な言葉を使っていたことに気づかされた。無意識にレポートに「信頼」「恐怖」といった言葉を使っていたのだ。同時に、生で感じた体験を書くことは難しく、大学の講義でそれらを発表する場があることが貴重なことなのだと考えさせられた。

この基礎演習では普段の講義で気づけない自分の無意識的な部分を知ることができ、理論上だけでなく能動的な学習が重要だと体感することができた。無意識に考えている私の自分の意見が正しくないことの恐れを完全に解消することは難しいが、意識して自分の意見を発表していきたいと考える。

〈コメント〉

「正解をのべなければ」というとらわれの強さとともに、無難に抽象的な言葉を用いて語ることへの気づきが述べられている、この種の感想は多くの学生に共通して認められる特徴である。

(03 男性) 「新たな授業体験」

これまで私が体験したことのある授業のなかで、主に中学校や高校においてはあながち、今回のような体験は初めてである。映像を見て、ただただその感想や意見を述べるというようなことは何度もあるが、その見せられた映像を観察し、考え、まとめ、レポートにし、そしてそれを発表し、意見交換をした上で、また考えるというプロセスは全く新しい体験であった。

『臨床力を高めるための感性教育』でも述べられていた学生達の感想と、私たちが発表した感想の間にはやはり同じようなものがあつた。まず、正しいことを言わなければいけないというとらわれについてだ。実際私もそう思いながら考えをまとめていた記憶がある。自分が感じたこと、思ったことを自由に発言せよと言われたとしても、話題から少し外れたことや、間違つたことを言つてしまわないかと考えてから発言するだろう。これを本文では受験教育の弊害と述べているが、全くその通りだと思つた。正解を出し、点数を取ることにだけ焦点を当てた教育を受けていたことにここで気づかされた。本文でも述べら

れていたように、自分の感じたことが正しいか否かわからなくなり、不安となって発言をためらうのだ。しかし、将来的に有用なのは正解をだすことだけではないと私は思う。たとえ間違っているとしても、大多数と意見が交えなくても、それはかえって新たな意見として尊重されるべきだ。本文の他方でも述べられていたように、人によって観察する着眼点は違い、見え方は異なるのだから、それはごく自然なことである。そういう中で、この受験教育の弊害を改善するために今回のような授業体験はかなり有用なのではと思う。少人数であったり、適切な教材が必要であったりと、条件としては限られてくるが、今回のような授業を重ねれば、相手の発言を尊重しつつ自らの主張を表に出せるようになるのではないかと考える。

抽象的な言葉を用いることについての論述は大変興味をもたされた。自分の考えをついついそれっぽい言葉で取り繕うことはよくあることで、私も今回のレポートで何度も抽象的な言葉を用いていたことに気づいた。「関係」や「信頼」などそんな言葉で表せるほど母親と子どもの間の関わり方は単純ではなかったのだ。本文に連ねて述べるならば、抽象度の高い言葉は一人一人のこころの動きを捉えるのには不向きであり、実際は多岐にわたる事象の中で共通項を見出すための思考法で、「普遍性」を追求しているものである。ここの「普遍性」は、今回のような母親と子どものような一人ひとり異なる感情、また、感性を持つものに対しては全く意味を成し得ないのではと思う。そうであるからこそ、抽象的な言葉でひとくくりにとまとめてしまうことはやはり、自分のこころの動きを感じ取れないときの困惑から抜け出すための知性化、または合理化であると述べられているのだと考える。

今回の授業体験、また、『臨床力を高めるための感受性教育』を読んだ中で、一番に思うことは、ふと気づかされることが多かったことである。先に述べたように、正しいことを述べようとしていたことや、抽象的な言葉を用いて合理化や知性化を図っていたことの他にも、自分以外の意見を多数聞くことによって自分の考えがいつのまにか多少変わっていたり、同じ映像を見て、同じ課題内容で出された課題ではあるが、タイトルをはじめ、内容がまるっきり違ったりすることだ。受験教育が普通だと考える今の教育とは一風変わった今回の教

育方法は「受動的・対話的で深い学び」を叶えると共に、社会福祉や心理臨床の現場で様々な理由から生活に困難を来している人々に対する理解と支援を実施できる人材を育てることに貢献できるのではないだろうか。

〈コメント〉

「ふと気づかされるが多かった」と述べていることに注目したい。この種の体験は、自分のなかの何かに対する様々な気づきが多かったことを指している。「感性教育」の意義の一つはここにある。自分で曖昧な部分を抽象的な言葉によってくくることによって自分をごまかしていることへの気づきを述べ、自己理解の深まりを体験していることがわかる。

(04 女性)「授業を通じた様々な気づき」

授業を重ねて、最初は同じ学部の中でもあまり話したことの無い人の前で自分の意見を発言することが緊張し、恥ずかしかった。人と違って変だと思われることが嫌だった。しかし、否定されることはなく、私の意見を受け入れてもらい、回数を重ねるごとに確実に人前で話すことに慣れることができたと思う。きっと皆もそうであったと思うし、皆の発言がどんどん活発になったように感じた。

一つ目の議題であった「主体的・能動的学び」についてだが、私が高校生ぐらいの頃からよく言われていたことで、私自身通っていた高校がSGH（スーパーグローバルハイスクール）に認定されていたため、いわゆるアクティヴ・ラーニングというものをやる機会は周りの学生よりも多かったと思う。そして、授業内で改めて主体的学びについて考えることができ、私がやってきたアクティヴ・ラーニングは、本当に主体的に学ぶことが出来ていたのだろうかと思いに疑問を感じた。中には私と同じように今まで高校などで行われてきた教育法に疑問を感じている人がいた。私は自分で考え、それを文字に起こし、発言し、周りの人の発言を聞くことで考えの整理をすることができた。中でも皆の発言を聞くことは自分の意見との違い、自分では気づくことのできなかつたことなど様々なことに気づかされ、とても収穫が多かったように感じる。

二つ目の議題は、ビデオを視聴して考えたことを発表するものだった。それ

は、一度目より多様な意見が出てとても興味深かった。先生から事前に配られた資料をもとに男児は自閉症だと断定し、自分の意見をまとめている学生もいれば、自分とは真逆の意見を持つ学生もいた。そして、A子さんの感想は、この私たちの基礎演習のメンバーの誰も言わなかった誰も目にとめなかったことを指摘しており、驚いた。そして私はA子さんのおかげで自分がモヤモヤしていた母親の男児の頭をなでる仕草を指摘しており、やっとそこで原因が分かり、スッキリすることが出来た。

初めにも書いたが、回数を重ねるごとに皆の発言が活発になったように感じた。最初は学籍番号順に書いてきたレポートを発表するが、その後「(学生の名前)さんは〇〇と言ってたけどどういうことかな?」と小林先生に尋ねられるのが書いてきたものを読むのでは無いためとても緊張したし、当てられるのが正直嫌だった。しかし、その状況に慣れたのかどんどん平気になって、最後は自分の感じたことを発言したくなり、家に帰ってすぐ次の課題に取り組むようになった。この授業を通して人前で発言することに慣れるだけでなく、振り返りなどをすることで自分の癖に気づくことができた。自分はやはり人の様子をうかがってしまっていた。自分より後に発言した人が似た意見だと何となくホッとしてしまった。そして全体をザックリとは捉えるが掘り下げて考えたりはしていなかったため、先生に掘り下げて質問されると準備していなかったためドキッとしてしまう場面が多かったように感じる。今回身につけたこと、自分自身気づけたことを使って今まで出来なかったことが今後出来るようになると思う。この基礎演習の時間は私にとってとても有意義であった。参加できて良かったと感じている。

〈コメント〉

この学生の以下の記述、「小林先生に尋ねられるのが書いてきたものを読むのでは無いためとても緊張したし、当てられるのが正直嫌だった。しかし、その状況に慣れたのか、どんどん平気になって、最後は自分の感じたことを発言したくなり、家に帰ってすぐ次の課題に取り組むようになった。この授業を通して人前で発言することに慣れるだけでなく、振り返りなどをすることで自分の癖に気づくことができた」ことに、私はいたく感銘を受けた。能動的な学習

を体験したことによる変化がじつにわかりやすく述べられていたからである。

(05 女性) 「小さな成長」

「主體的・能動的な学び」をテーマとした基礎演習は私にとって苦しいものだった。なぜなら、毎回みんなの前で自分の意見や感想を言わなければならなかったからだ。出会って間もない先生や生徒に自分の意見を語るのには恥ずかしい。もし、自分の意見がその場にいる人達の意見と外れていれば尚更恥ずかしいと思う。この考えがあったから、私は正解に近い答えを言おうと思った。その場の空気を読み取って正解を考えるのはそれほど難しくない。しかし、「主體的・能動的な学び」をテーマとした活動では、間違いを恐れず自分の意見を率直に発表することが課題だった。私はそこに頭を悩ませた。

このように考えるようになった原因はやはり高校までの学習環境にあると思う。基礎演習のように生徒が円になって語り合う授業は一度もなかったが、普通の授業でも自分の意見を発表する機会はたくさんあった。その中で特に、小学校の授業で、間違いを言うとすぐに先生に訂正されたり、人と違う意見を言うと目立って周りから変な目で見られたりすることがあった。その頃から私は自分の意見を不安に思い、恥を恐れるようになった。そして、授業では正解を導き出すことが正解だと思い、それを徹底した。それが勉強なのだとも思ったからだ。

しかし、この基礎演習でその考えが少しだけ変わった。はじめにアクティヴ・ラーニングについて学んだことで、自分の意見を隠さず他者と語り合うことが大事なのだと理解した。また、そのことをみんなで同時に学んだことから、アクティヴ・ラーニングを実践する雰囲気になり、自分の意見を語りやすい環境にもなったと思う。しかし、それだけでは私の根付いた恥の恐れは消えなかった。そのため、私の意見はみんなと比べて教科書を真似たかのように硬い文章になっていたと思う。しかし、回を重ねるたび、自分と違った意見を聞いたり、面白い意見を聞いたりしていくうちに、自分もみんなとは違う自分なりの意見を言いたいと思うようになった。また、とても素直に自分の言葉で表現している人がいて、その人に背中を押される形で私も少し自分なりの表現が

できたと思う。自閉症スペクトラムの子どものビデオを見た時は、私とは違った視野で語られた意見に驚いたり、逆に、私にしか気づけなかったこともあると気づかされたりした。このような他者との間に生じる驚きや発見がアクティヴ・ラーニングの醍醐味であり、それが課題の解決に繋がるのだと思った。

基礎演習の活動で、私は以前より自分の意見を素直に語る事ができたと思う。しかし、それはアクティヴ・ラーニングと一緒に学んだメンバーが相手で、アクティヴ・ラーニングを実践する雰囲気があったからかもしれない。今でも恥の恐れは残っている。他の場所では、私はまた自分の意見を隠してしまうかもしれない。また、自分を守るためにはそれでもいいとも思っている。正直、このようなことを述べるのは迷った。『臨床力を高めるための感性教育』を読むと、私と同じような講義を受けたゼミの学生さんは、「成果が出た」、「良い経験をした」、「これからに活かしたい」というような前向きな意見が多かったからだ。一方、私はアクティヴ・ラーニングを理解し、その良さを実感したにも関わらず、今までの受け身の学習態度を変えるのは簡単ではないと思うし、集団主義の世の中では自分の意見を隠すのも当たり前だと思っている。このような意見は、今回のレポート課題の答えとしてはふさわしくない気がする。今までの私だったら空気を読んでゼミの学生さんのような意見をここに述べていたかもしれない。しかし、今私は迷った末、正直に自分の意見を述べている。このような変化は、間違いなく今回の「主体的・能動的な学び」をテーマとした活動がもたらしたものだと思う。たとえ間違っている自分の意見を隠さず述べる事ができたことに私は自分の小さな成長を感じている。

〈コメント〉

人前で発表することへの不安が強かったにもかかわらず、「回を重ねるたび、自分と違った意見を聞いたり、面白い意見を聞いたりしていくうちに、自分もみんなとは違う自分なりの意見を言いたいと思うようになった」ことが述べられている。「感性教育」の目標のひとつがこの学生の体験となって示されている。

ただ「このような意見は、今回のレポート課題の答えとしてはふさわしくないような気がする」と述べているところに、まだ他者の目を気にしすぎている

ところを強く感じさせるものがあるが、そうした不安に抗うようにして。「たとえ間違っているでも自分の意見を隠さず述べるのができた」ことでこの学生は「自分の小さな成長を感じている」と述べている。このように自分の気持ちの変化のプロセスを率直に述べているところに、私は非常に好感をもった。

(06 男性)「これまでの学習を通して学んだこと」

これまでの基礎演習の学習を通して、自分は多くのことを考えさせられた。そして多くのことを学ぶことができた。

まず、アクティヴ・ラーニングについてだ。自分はこの学習をするまで、学びということに対して真剣に向き合ったことがなかった。中学や高校時代はよく耳にすることはあったが、こういうものがあるのかと思うぐらいで、はっきりとどういうものだったのかは覚えていない。正直、今回の学習でアクティヴ・ラーニングについて完全に理解したとは言えないが、明らかに中学や高校時代より、アクティヴ・ラーニングに対しての学びは深まった。今の日本にはアクティヴ・ラーニングは欠かせないものであると思った。なぜなら、どの授業を見ても積極的に発言をし、意欲的に学ぼうとする学生はほとんどいないからだ。こういった現状を変えるために改革が必要であると思う。大学生は中学や高校よりも自由に学ぶことができるので、大学の授業でいかに主体的に学ぶかが大切だと思う。

また、特に今回の基礎演習のレポート内容をみんなの前で発表をするときに正解がない問いに対して意見や感想を発言することが不安のためう人がいるということを知り、自分もそのような状況だったので、みんなもそう思っているのだと知り、少し安心した。

あと、先入観ということもとても考えさせられた。供覧ビデオを視聴する前に自閉症の子どもの研究だと意識して視聴した人は、子どもが自閉症であるがために普通の親子とは違ったように見えたという意見があった。しかし、自分は自閉症ということを考えずに視聴したため、特にその親子がおかしいと感じたことはなかった。でも、みんなの意見を聞いたうえで、もう一度ビデオを視聴すると、少し違和感を覚えた。ある情報を持っているか持っていないかで感

じ方が異なってくるのが分かった。

自分はこれまでの基礎演習を通して、人間の関わり合いが一番大切であると思った。なぜなら、社会福祉士になるにしても精神保健福祉士になるにしても生身の人間を前にその人をどう理解し、対処していくかということが求められるからだ。また、将来どういった仕事に就くといった具体的な目標はないが、どの仕事についても人間関係はとても大事になってくる。そういった中で、自分をどう出していくかということが求められる。現代社会は、インターネットやコンピュータが急速に発展し、人間関係が薄れていると思うので、今のうちから、スマートフォンやインターネットばかりに頼るのではなく、自ら学び、思ったことを自分の言葉で伝えられるようになりたい。そして現代社会の波に飲み込まれすぎないようにしたい。

(07 女性)「自分の成長に向けて—基礎演習で見えた伸び代—」

今回の基礎演習のような、自分の意見を述べ、他人の意見を聞きながら進んでいく授業は、私にとって新鮮なものだった。高校までの授業で他人の意見を聞く機会はあったが、そこからさらに考察し、自分の考えを深めていくことは無かった。

全体を通して、意見を述べる時には具体的に述べた方が理解してもらいやすい、ということ学んだ。抽象的な表現をした方がいい場合もあると思う。しかし、この基礎演習では具体的な意見の方が適切であり、他者に理解してもらいやすかったと感じた。それは他人の意見を聞いているときに、頭に入ってきて、かつ、その人の考えから自分が何か考えることが出来たのは、そのような具体的な意見のときが多かったからだ。

「子どもが『深い学び』を遂げるために」を読み、進んでいった授業では、自分を見つめ直すことが出来た。受動的な姿勢よりも主体的な姿勢にみんなが肯定的であった。しかし、どうしてそう思うのか、という理由が人それぞれで面白かった。私も自分の意見が他人の意見と違うことに不安を感じていた内のひとりだ。しかし「自分と違う意見を聞くのが面白い」と何度も感じたことによって、多少は人と違う面を肯定的に捉えることが出来るようになった。「み

んな違ってみんないい」というフレーズをよく耳にする。頭では理解していて肯定的に捉えてはいたが、私は反対の「みんなと同じ」ことに安心し、そうでないと不安を感じていた。(頭で)理解していることと感覚が矛盾していた。深く考えたことはなかったが、不思議には思っていた。しかし「みんなと違う」ことを少し肯定的に捉えることができて、その矛盾が無くなってすっきりできる可能性を感じるようになって、嬉しく思っている。

映像を見て進んでいった授業では、人間の観察の難しさを学んだ。自分がそういったことに関して未熟な点しかないことを痛感した。まずは、もっと慎重に、丁寧に出来るようになりたい。今後の自分の課題を見つけることができた。

この基礎演習の授業の中で学んだことを、今後の生活で活かしていきたい。
(コメント)

この学生の体験談は、なかなかの重みを持った内容である。「『みんな違ってみんないい』というフレーズをよく耳にする。頭では理解していて肯定的に捉えてはいたが、私は反対の『みんなと同じ』ことに安心し、そうでないと不安を感じていた。(頭で)理解していることと感覚が矛盾していた」と述べているところであるが、自分のなかにある自己矛盾に気づくとともに、それに対して、「少し肯定的に捉えることができて、その矛盾が無くなってすっきりできる可能性を感じるようになって、嬉しく思っている」と述べている。「感性教育」の大きな成果ではなかろうかと思う。

(08 女性)「学ぶこと」

今回、基礎演習でこのような体験をしてみて、こんなに自分の意見をみんなの前で発表する機会はほとんどなかったし、人前で自分の意見を発表することは得意ではなかったので、毎週とても緊張した。アクティヴ・ラーニングの授業のとき、誰かが言っていたように、私も「人と全く違うことを書いていたらどうしよう」という気持ちがとても強くあった。それに、みんなの意見を聞いていると、とてもレポートを書くのが上手で、自分の文章能力の低さを感じると同時に、次に書くときはこういう表現を使おうと参考にもなった。

私たちは、中学、高校と受験のための勉強がほとんどだった。道德の時間に

自分の意見を書いて班内で発表しあって意見を1つにまとめて全員の前で発表するという授業はあったが、その授業も1年に2回ほどだった。こんなに毎週自分の意見をみんなの前で話すことはなかったので、毎週不安な気持ちでいっぱいだったし、もうやりたくないというのが本音だった。しかし、受動的な学習ばかりして、自分の意見も人前で言えないようでは社会にでたとき通用しない。だから、今回のこの体験は自分にとって、とても意味のあることであり、このような経験をしておくことは、とても大事なことだと思う。受動的な学びばかりしてきた私にとって貴重な経験となった。

しかし、自分の意見を明確に伝えることは、慣れておかないと、すぐに上手くできるものではない。上手く伝えられるようになるには、小学校の頃から能動的に学べる授業を取り入れて、自分の意見を人前で伝えることに慣れておくことがよいと思う。小さい頃から慣れておけば、自然と自分なりの考えが生まれて素直な意見を伝えられるようになる。そうすれば、中学、高校と、どんどん話し合いの質も上がり、大学を卒業して就職したとき、「社会の役に立つ人間」に近づけると思う。そういう意味では、今回の授業での体験はとても必要なことだった。当たり前だけど、一人ひとりみんな違った考えで、似ている人はいても、全く同じことを言う人はいなかった。聞いていると、自分にはこんな考えできないなと思う意見があったり、自分と似ているなと思う意見があったりとさまざまにいろいろな発見もあって、面白かった。

これから、いろいろな事に興味を持つことで、いろいろな視点から物事を考えられる人になりたい。

(09 女性) 「全講義を通しての感想」

これまでの基礎演習の「主体的・能動的な学び」を目指した試みを振り返って、個人的には今まで体験したことがないような授業で知識を身につけたというよりも技術を習得したといった方が適切ではないかと思った。全授業の流れの中で、最初に「アクティヴ・ラーニング」が「主体的・能動的な学び」を目指して行われていることを理解したことで、自分の中学・高校生時代の勉強を振り返って、自分が基本的に学校の先生から知識を一方に授かるスタイルを当

たり前のように「学び」と捉えて、自分で考え、それ言語化し発信するという「学び」をやってこなかったことに気づき、この授業をスタートしたことは、先生のこの授業の目的を明確に認識し、自らの体験を参考にしながら参加することができて、とても有意義であった。

まず、この授業で私は、自分の感じたこと、考えたことを自分の言葉で表現して、聞いている人にわかりやすく伝えることは本当に難しいと思った。人に伝える前に自分がなんとなく感じたこと、考えたことを捉えて言語化しようとしても言葉が出なくて、内容がうまくまとまらず、支離滅裂な文章になってしまい、とても苦しんだ。また仮にできたとしても相手に納得してもらえるか、もしくは自分の発言が場をしらけさせる発言ではないかと消極的になってしまう自分がいたことが少し残念であった。これは、自分の力不足やリスクを回避しようとする心の弱さもあるが、今までの学生とのときの経験から間違えることは、とても恥ずかしいことであるという考えが自然に常識として植え込まれていたからであると思った。今後の課題としてもっとロジックを立てて、自分の意見をしっかりと周りの目を気にせずに言えることが必要だと思った。

次に、この講義でとても印象に残ったことについて話したい。それは事例のビデオの映像を3回見たことである。私は、最初は映像をみるときに赤ちゃんの行動だけを観察して感想を述べた。1回目の意見交換の際は、みんな赤ちゃんの行動をみて、それぞれの感想を述べていた。しかし、みんな赤ちゃんについての観察をしていたのにそれぞれに自分なりの考え方があることに驚いたし、自分の見落としているところにも気付いたので面白かった。また、3回目の授業でA子さんの感想を読んで、この学生は母親の行動にまで目を向けていた。この感想文で考えたことは、自分とこの学生との着眼点の違いはどこから来ているのかということだ。私はこのビデオをみて、母子の（愛着）関係について述べなさいと言われたとき、母親の行動なんて考えず、すぐに赤ちゃんの行動を観察しなきゃという固定観念にとらわれ、母親を単にこの研究の条件としか考えてなかったことにA子さんの感想を読んで気づいた。本には、着眼点のちがいは、自分のそだちを振り返りながら、気づくことができたように思うと述べられている。しかし、わたしは、自分のそだちを振り返りながら、考え

てみてもなぜこの違いが生まれるのかがわからなかった。その原因は、自分のそだちは他の子とあんまり変わらないという認識で生きてきて、自分の当たり前は他の人と同じと思っていたからだ、と新たな気づきが生まれた。また、同じビデオの感想を何回も吟味して述べるという授業の形態も今まで自分の受けてきた授業とはちがって新鮮だった。今までの授業は一回授業で学んだら、感想を書いて次からは違うことに取り組むということが多かった。この経験から、一回書いたらもうこれ以上感想は書くことはできないと難しく感じていたが、人の感想をフィードバックして自分の視点に入れることで、ものの見方、捉え方が多様化して自分の考えが深まっていくのを感じた。

そして、最後にこの基礎演習の授業は学校の授業よりも社会に出て最も役にたつ力を鍛えているように感じた。私はもともと自分の社会人基礎力に不安を感じていたので、この授業を受けた意味は大きい。大学の授業でもアクティヴ・ラーニングのような学びをする機会は少ない。そんな中で自分の意見を発信したり、自分の観察力を高めていったりするこの授業はわたしのなかで貴重な経験になるであろう。

〈コメント〉

この学生の「社会に出て最も役にたつ力を鍛えているように感じた」という感想は、私の目指すところと一致したもので、大変心強い内容である。

(10 女性)「自分と成長と改善点

—『臨床力を高めるための感性教育』を読んで』

基礎演習を振り返り、自分と向き合うことができたと思う。

最初に「アクティヴ・ラーニング」についての資料を読み感じたことを述べよという課題を出されたときは正直戸惑いでいっぱいだった。これまでこのように自由に意見を求められるという課題を出されたことはなく、はじめての経験だったからである。先生がどのような意見を求められているか正解がわからず、初めてのレポートの時は率直な意見を述べられず、どこか自分の意見を着飾った文脈に変え述べてしまった。本当はこう述べたい気持ちはあるけど他の人が聞いたら変に思うかもしれないというもどかしい気持ちでいっぱいだった。

た。しかし、みんなの感想を聞いて、そのような着飾った文章は人の心に響かないと思った。先生がとても高く評価しているように感じた人の感想文は、やはり私の心にも響いたし、なるほどと思う率直な個性的な意見を述べていた。

率直に述べることは恥ずかしい気持ちもある。しかし、次の課題で、みんなの意見を聞いた感想を書くときには、できるだけ自分の気持ちに素直に向き合い、その気持ちを文字に起こすように心がけた。すると、次の授業の時、先生が率直な気持ちを書いていると言ってくれた。自分の意見が的外れになっていないか不安で仕方なかった自分には非常にうれしい言葉だった。率直な気持ちに述べることは清々しいことで、これまで率直な意見を述べることを恐れていた自分にはとても新鮮な経験だった。

このような成長がみられた一方で、授業の中で伸ばしきれなかった能力もある。それは伝える能力だ。自分の感想を述べた後に先生から問いを投げかけられたときに、考えがうまくまとまらずにいた。しかし、沈黙はいけないと思い、話し出すと支離滅裂な文章になり正直自分が何を話しているかわからなくなった。瞬時に自分の考えを言葉にして相手に伝えるという能力がまだ私には乏しいと感じたし、もちろんみんなにも伝わらなかったと思う。一対一の時は待ってもらえるかもしれないが、集団の場になれば考えをうまくまとめ、言葉に変換する作業を早くする能力は必要とされるものになってくる。そのようなことを感じていた私は『臨床力を高めるための感性教育』を読んで、その中に〈感じたことを言葉にすることが難しい〉という文章を読み「これだっ!」と思った。私は感じたことを言葉にすることは私が人よりできていないだけで、他の人は容易にできると思っていたが、〈想像するほど容易ではない〉と述べられているのを読み少し安心した。いまだ言葉にできないけれど感じていることを言葉にするには何かに喩える術しかないと思ったので、最初のうちはうまく表現できないかもしれないが、経験を積み感性を伸ばしていきたい。

まだまだ、この基礎演習を通して自分と向き合い自分の考え方などの特性を他の人と比べ感じたことがたくさんある。このような経験はなかなかなかったので、この基礎演習は長い間記憶に残る授業になると思う。自分と向き合い成長したこと、まだまだ改善しなければならないことが分かったので、これから

の大学生活で自分を高めていきたいと思う。

〈コメント〉

この学生は「先生がどのような意見を求められているか正解がわからず、初めてのレポートの時は率直な意見を述べられず、どこか自分の意見を着飾った文脈に変え述べてしまった。本当はこう述べたい気持ちはあるけど他の人が聞いたら変に思うかもしれないというもどかしい気持ちでいっぱいだった」と述べているが、「もどかしい気持ち」こそ、私がこの「感性教育」の教材として用いている子どもの心理そのものを指している。それゆえ、この学生は、自分自身に内在しているアンビヴァレンスという心理に気づいたのだ。そして「みんなの感想を聞いて、……着飾った文章は人の心に響かないと思った」ことから、自分の「もどかしい気持ち」から目をそらすことなく、「自分と向き合うこと」の大切さに気づいたのであろう。この学生の体験談を読んで、私は「感性教育」の醍醐味はここにあると実感した。

(11 女性)「これからの教育における『能動的』学び」

これまでの基礎演習を通して、大学生になるまでには出来なかったような経験をたくさんでき、学生が本当に必要とされている能力とは何かを理解することができたと同時に、このクラスでなければ学べなかったような大切なことが学べたと思います。

基礎演習で初めてレポート課題が出されたとき、大学生になって初めてのレポート課題だというのもありましたが、こんなにたくさんの資料を読んでもよくまとめられるのかどうか、不安しかありませんでした。それに加えグループ内での発表もあり、自分の書いたことが正しいのかもわからないままに緊張しながら読み上げた覚えがあります。この気持ちはおそらくクラス全員が持っていたものと思いますが、このことですでに、いかに私たちが怖気づかずに自分だけの考えを持ち、発表するという事に慣れていないかが表れています。

ビデオでとある母子の様子を観察し、その関係性を読み取る授業でも、はじめのうちは、先生はこの映像から私たちに何を読み取ってほしいのだろう、発表するまで自分の意見とグループの人たちとの意見の違いが判らないから怖

い、ということしか考えられず、映像の中で起こっていることを素直に受け止め、自分が感じたことをそのまま書くことにとてつもない不安を感じていました。

そんな自分が最終的には自分の意見を言うことに対してあまり抵抗を感じず、むしろほかの人とは違うことに気づいてみたいと思えるようになりました。このように徹底して生徒自身に意見を述べさせるというような授業はほんとうに新鮮で、そのおかげで今のように感じられるようになったものと思います。

『臨床力を高めるための感性教育』でも述べられていた通り、これからの臨床心理、福祉関係の現場にはさらなる自己理解・他者理解が大切になってくると思います。しかし私たちが受けてきた、現在行われている受験のための教育では、黙々と教科書やノートを読み込むだけで、他人への理解を深める場といえば休み時間くらいのものであったように思います。これでは人と人とで授業を行う意味がなく、とてももったいないことなのではないかと感じました。この基礎演習がそれに気づかせてくれただけでなく、自分の中で自己理解・他者理解を高めるためのきっかけとなりえたと感じています。これからの教育現場において本当の意味でのアクティヴ・ラーニングが活用されるようになるにはどうすればよいか、今まで受験教育を受けてきた私たちだからこそその視点で考えてみたいと思いました。

またこの授業では、能動的な行動・考え方についてだけでなく、大学生活において今後大切になるであろうことについても学べました。特に母子の関係を見る授業では、臨床心理としてだけでなく普段の人間関係にも役立つような観察のポイントをたくさん聞けて、やはり高校までの授業とは違うことを改めて実感できました。一部分だけを集中して見ることも大事だが、すべてを見通し全体的な流れをつかむことや、客観視・主観視のどちらも重要であることなど、観察においてのみならず生きていく上で物事を考える際に大切なことを学べたと思います。

(12 男性)「アクティヴ・ラーニングの素晴らしさ」

私は、西南学院大学に入学して「主体的・能動的な学び」を学習し、初めてアクティヴ・ラーニングという言葉を目にした。それと同時にアクティヴ・ラーニングについて考えるいい機会をもつことができた。

私は中学生までは積極的に発表や話し合いをしていた。ただ今になって考えてみれば、それは「受け身の学びではダメだ」と思っていたわけではなく、無意識的にやっていたものだった。高校生になってからは、徐々に授業中に言葉を発することが減っていった。自分でも原因はわからないが、強いていえば“恥ずかしい”という気持ちだったのではないだろうか。時折、発表しなくてはならない、みんなと意見を共有しなければならない、という気持ちはあった。しかし、使命感としての積極性は本当のアクティヴ・ラーニングではないと考えた。アクティヴ・ラーニングについて皆と意見を共有した時に、自分たちがアクティヴ・ラーニングを実践するのはすでに手遅れという意見が出た。とても共感した。環境とその人の性格によって、できる・できないが決まってくるのではないだろうか。初対面の人しかいないところで積極的になれと言われてもそう簡単ではない。

しかし、たくさん発表し、他と言葉を共有した経験がないわけではない。授業に積極的に参加することは、学習面での向上はもちろんであるが、素直に楽しいと思えた。学習が楽しいと思うことができるアクティヴ・ラーニングは素晴らしいものだと思った。もし、本当に万人のための「主体的・能動的な学び」が存在し、成功したらこれからの子供たちは今までとは比べ物にならないくらい圧倒的な学力、人としての明るさ、何に対しても積極的に挑戦できる人が育つのではないだろうか。極端な話ではあるが、私はそれくらいアクティヴ・ラーニングを称賛したい。実践できるかは別として、心から知れてよかったと思っている。

では、実践するためにはどうしたらよいか、考えてみる。率直に個人的な意見としては、3～5人構成で、ある程度話せるくらいの知り合いであれば、淡々と意見の出し合いができると考える。大学生にもなって甘えていないかと言われるればそうかもしれないが、今まで実践してこなかった自分は、アクティヴ・

ラーニングの形を捉え、慣れるまでは上記のやり方が一番適していると考えた。さらに、指導者の教え方も変えなくてはいけないと考えた。どこの学校に行っても、先生によって教え方、考え方が違うはずだ。多少の異なりは必ず生じるので仕方がないが、明らかに矛盾している場合もある。生徒に対してどういう思いで授業をするのかが肝心ではないかと考える。

すなわち、生徒の授業に対する姿勢、指導者の生徒に対する姿勢、これら二つが伴って初めてアクティヴ・ラーニングが成立するのではないだろうか。この基礎演習の「主体的・能動的な学び」の試みのおかげで、学習に対する視野が広がり、これからの人生に活かしていきたい。

〈コメント〉

学生自身の気づきを述べるだけでなく、教師（教員）自身の教え方にも再考を促がしている。当然のことながら学生も我々の教え方に批判的眼ざしを向けていることを自覚しなければならない。

（13 女性）「これからの日本の学びについて」

これまでの基礎演習では、深い学びを遂げるためにとある事例を通して、各々の意見を発表し合ってきた。このことを振り返り、自分が感じたことを述べようと思う。

まず、はじめてのレポート課題は、アクティヴ・ラーニングについてだった。突然、資料を渡され「来週までにこの資料について自分の意見をまとめてくること」と言われた時は非常に驚いた。大学に入学したてで、まだ授業も慣れていないのにこんなに丸投げな課題を課せられるのかと思いつつも、不安な気持ちでレポートを完成させた。その完成させたレポートを班に別れ、発表する際に私は早く終わらせてしまいたい一心で、早口で読み上げてしまった。読み終えた後、これは学びに対して非能動的な態度なのではないかということに気づいた。この気づきを、次回からに生かすことが出来れば、自分もアクティヴ・ラーニングに参加することが出来たかもしれない。しかし、そううまくはいかず、自分は終始非能動的な態度であったと反省している。

今回の基礎演習で、ほとんどの人が学びに対して非能動的な態度であること

がわかった。しかし、とある男児の事例のビデオを見た際、小林先生が一人ひとりの意見にコメントを付け、議論のキャッチボールをしているのを見て、話を振られたらみんな自分の意見を述べる事が出来ることに気づいた。これを利用して能動的な学びに繋げることが出来るのではないだろうか。これまで受動的な教育しか受けてこなかった私たちでも、周りの教育者達のサポートがあればアクティヴ・ラーニングをすることが出来るだろう。

すぐに今の日本にアクティヴ・ラーニングを取り入れることは難しいかもしれないが、学生世代からじわじわと能動的な学びを取り入れていけば、いずれみんなが能動的に学ぶことができる社会が訪れるのではないだろうかとこれまでの基礎演習を振り返り考えた。

〈コメント〉

「感性教育」を試みる際にもっとも重要なことは、ファシリテーターとしての役割を担う教員の感（受）性である。学生のちょっとした発言やつぶやきを即座にキャッチして、その意味をつかみ、対話の中にそれを引き出していく。そのことによって発言者は自分の発言内容の大切な意味に気づくことができる。その意味からすれば、この学生が「小林先生が一人ひとりの意見にコメントを付け、議論のキャッチボールをしているのを見て、話を振られたらみんな自分の意見を述べる事が出来ることに気づいた」と述べていることから、多量なりとも私のファシリテーターとしての役割を果たせていることがうかがわれてうれしい。

(14 女性)「基礎演習の講義を受けて」

「アクティヴ・ラーニング」や、「乳幼児期の自閉症スペクトラムの事例のDVDを観て」自分の意見・考えを自分の言葉で表現するなど、高校までの学校生活での学びとはかけ離れた体験が出来たと感じた。

「アクティヴ・ラーニング」の事について考えた講義を通して、今までアクティヴ・ラーニングを実践することは愚か、まともに意味も理解していなかったことを痛感させられた。その講義では、アクティヴ・ラーニングを実践するために、どのような工夫が必要となるのかを自分で考え、友達の意見を聞

いて、より理解を深めることが出来た。アクティヴ・ラーニングが、今後実践できると思う人、思わない人に分かれて、様々な意見を交換することができた。その中で、アクティヴ・ラーニングを実践するためには、「主体的・対話的で深い学び」ができる環境作りが必要不可欠であると考えた。今まで、アクティヴ・ラーニングをしていなかった私たちにとっては、少し難しいかもしれないが、小学生など幼い頃からアクティヴ・ラーニングを実施することで、「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」ができると感じた。また、基礎演習のように少人数での講義では、自分の意見を「自分の言葉」で発表し、友達の意見を聞くなど、「主体的・対話的で深い学び」が実践できていると身をもって感じる事ができた。

「乳幼児期の自閉症スペクトラムの事例の DVD」から、親子関係や子どもの仕草・行動から、子どもが感じていることを自分なりに考えた。3日目の DVD では、先生が DVD を止めながら、少しずつ観ていくことによって、些細な点に気づくことが出来た。前回の講義のアクティヴ・ラーニングの「対話的な学び」により、視野が広がり、様々な角度から観察することの重要性を感じた。

臨床力を高めるためには、感性を磨かなければならないと考えた。自閉症スペクトラムの事例 DVD を観る講義では、正解がないため、自分が率直に感じたことをレポートに表現するのが困難だと感じた。しかし、少人数のグループ編集であれば、自分の率直に感じた意見を言いやすいと思った。

(15 男性)「私を変えてくれた基礎演習」

私は西南学院大学に入学し、基礎演習での学習からたくさんの事を経験し学んだ。なかでも強く印象に残っていることが二つある。

一つ目は、アクティヴ・ラーニングの大切さだ。大学の授業は高校までの学習とは違い、受身になってただ授業を受けていただけでは深い学びへと達することはできない。自ら進んで主体的・能動的な学習を行うアクティヴ・ラーニングが必要となってくる。私は今までどちらかというただ授業を受けているだけという受動的な学習をおこなっていた。しかし、基礎演習を通して私は少

し変わることができた気がする。互いに意見をかわしたりしたこととで少しずつではあるが主体的・能動的な学びへと近づくことができたと思う。また、人前での発表を繰り返しおこなったことにより、人に自分の伝えたいことを伝える力が少しつuitaと思う。人に自分の伝えたい事を伝えるというのはとても難しいことだと基礎演習でよくわかった。だがこの力は社会にでた時にとっても必要になってくると思う。これからの大学での4年間でさらにこの力を伸ばしていきたい。

二つ目は、自分の視点や視野について知れたことだ。自閉症の男児が登場するビデオ学習で、母親と男児の関係性を観察しそれをレポートにまとめることで自分がどういった点に注目し、観察を行っていたのかを知ることができた。これはとても大きな経験になったと思う。普段は、自分がどういう観点から物事を見ているかなど知ることはないのでもとも勉強になったはずだ。

また、互いのレポートを発表しあったことで自分が人と共通している点や自分がまったく気づかなかったところなどを知れたのもすごく勉強になった。互いに意見をかわすことの大切さも今回の基礎演習の学習で学んだ大切なことのひとつだ。お互いの意見のいいところや悪いところも指摘しあうことでさらに上の学びへと到達できると思う。ここから私は、グループワークこそがまさに主体的・能動的な学びを行うアクティヴ・ラーニングだと思った。

最後に、今回の基礎演習を通して学んだたくさんのことを生かしてこれからの大学生活を実りのあるものへとしていきたい。特にアクティヴ・ラーニングは継続して実践していきたいと思う。そして4年後就活の際には、社会から必要とされる人材へとになりたい。

〈コメント〉

「自分の視点や視野について知れた」ことによって自己理解が深まったことが、この学生の「私は少し変わることができた気がする」という実感として述べられている。

(16 女性)「主体的・能動的学びを通して得た自己理解」

この基礎演習での授業内容は、高校までの授業とは大きく異なったものだった

た。今までは、単語や公式を一方的に教わり理解する授業が多く、大学になった今でもそのような授業形態が非常に多いように思える。だから、レポートを書き、他者の意見を聞くこの授業はとても新鮮なものだった。自分の考えを発信し、他人のものと比較しながら何度も1つのことについて考えることで、自分に対する理解を深めると同時に、他者に対する理解も深めることができた。

アクティヴ・ラーニングについての授業では、初めてレポートを書いたために、自分の意見や思っていることを言葉にする作業にかなりの時間がかかった。文章を読むと、納得できる部分がたくさんあり、特に子供のできないこと、苦手なことをなおすことにばかり目を向けた教育が子供の無力感を形成してしまうという部分にはとても共感した。アクティヴ・ラーニングの目指す教育が日本全体で行われるようになれば、世界で活躍する人材を輩出できると感じた。

しかし、みんなとの討論を重ねる中で、今の日本社会において、果たして受け身的な学びを変えることができるのだろうかという疑問が浮かんだ。この疑問に対する答えを自分なりに考えた結果は次のようである。「日本全体で受け身的な学びを変えることは難しい。なぜなら、今の日本には、『謙虚さこそ美德だ』という意識が根付いているからだ。これは、昔から現在に至るまでずっと『日本人らしさ』として大切にされてきた結果、形成されたものであるため、この考えを日本国民全体から変えていくことは不可能であると考える。だから、社会全体が変わらなければ、受け身的な学びを根本的に変えることは難しい。」これが、自分自身で出した結論である。自分の中にあるこのような考えを言葉にするのは大変だった。初めは文章のすべてに納得してしまい、筆者の考えに賛同するばかりで自分の意見というものを持っていなかった。他者の感想を聞いて、また、先生に自分の考えを述べるよう導いてもらいながら、やっと自分なりの意見を持つことができた。自己理解が深まったことを強く実感したと同時に、この学びこそがアクティヴ・ラーニングなのだと思った。

次に先生が提示したテーマは、新奇場面法のビデオ観察であった。アクティヴ・ラーニングの時に文章を読んで感想を書いたが、観察をしてその考察を述べるのは、感想を書くのとはやり方が違い、難しかった。今まで、考察らしい

考察をしたことがなかったからだ。というのも、これまで考察をするといえば、理科の授業で実験を行い、出た結果からどんな化学反応が起こっているか、なぜそうなったのかを考えるくらいのものであったのである。しかし、この考察には答えがあった。試験管に入っているどの液体を混ぜれば何の化学反応が起こるかの答えを先生は知っていて、それを確かめるためだけの実験だった。考察といっても正誤の判断がなされてしまうものであって、自分の考えを述べたものではなかった。今回の授業で、初めてビデオを見た感想を述べた時にも、今までの考察の仕方の癖が残っていた。「この子は発達障害の疑いがある」という先入観から観察を行ってしまい、「親がいなくなるとすぐに泣き出してしまふ」とか、「ストレンジャーを拒絶するような態度をとっている」などと、親子それぞれの小さな仕草や言動をあまり見ずに正解に近づけようとした考察をしてしまっていた。ほんの少しの手の動き、視線の変化など、隅々まで観察をしている他者の感想を聞いて、自分の考察は自分自身で考えた意見を述べることができていなかったことに気が付いた。そうして再びビデオを見て新たに考えをまとめることで、自分と他者の意見の違いを知り、なぜそのような違いが生まれたのかということまで考えることができた。他者理解を深めるためには、自分と他者との比較が大切だということを知った。

基礎演習の授業を通して、正しいかそうでないかを気にせず、自分なりの意見を持つことができるようになってきたと思う。先生の著書を読んで、この授業で自分と他者を深く理解するために必要なことを学ぶことができたことと改めてよく分かった。「自分の意見を自由に発言することが難しいのは、正しいことを言わなければならないというとらわれが強いからだ」という部分が先生の著書にはあったが、このことは授業を通して身をもって実感した。さらに、自分と他者の着眼点が違うと見え方が異なるということにも初めて気が付いた。今まで受験のための勉強で詰め込んできた知識は様々あるけれど、これから社会に出て必要なことは、正解のない問題に対して他者と意見を比較し合いながら感性を磨いていくことだとわかった。まだまだ積極的に発言できてはいないけれど、「主体的・能動的な学び」を体験し、知らなかった本当の自分というものもわかってきたように思う。

〈コメント〉

この学生の体験談には「自己理解が深まった」ことが具体的によく述べられている。それが「自分なりの意見を持つことができるようになってきた」という実感として語られている。

(17 男性) 「アクティヴ・ラーニング」

これまで、3回の赤ちゃんと母親のビデオについての講義を行ってきたが、感じたことは最初の頃の自分の考えと、終わってみての自分の考えを比べると、自分の中で考え方の変化が生まれているなど感じた。

最初の頃の自分の意見は、「赤ちゃんにとって母親は非常に大切な存在で、唯一心を許している存在だ」という感想を述べている。また、母親の意見のこの子を赤ちゃんらしく感じたことがないという意見に対しては、まったくそのように感じられなかった、と述べている。

2回目の講義の感想は、1回目の他の人の意見を聞いて、自分の観察能力の低さを感じさせられた。自分以外の多くの人が、赤ちゃんが母親となかなか目を合わせないといったところなどに注目して見ており、赤ちゃんは母親に対して心を閉ざしているという意見を持っていた。そのことを頭に入れたうえでもう一度ビデオを見ると、赤ちゃんは母親に対して否定的な態度をとり、母親を拒否しているように見えた。

そして、3回目の講義では、A子さんの文章を読んだ自分の感想で、私は赤ちゃんがここまで考えることができるのかという意見を持った。母親が近くにいるときは半ば母親を無視するようなそっけない態度とっているのに、いざ母親がいなくなると、それまでとは打って変わって心細そうな様子になるのが非常に不思議だったし、印象的だったという意見がそう感じさせた。

このように、自分の意見が変わったのは、自分が自分の感想を持って終わるのではなく、自分の意見を他の人に発信し、ほかの人の意見を聞きまた考える。このような学習方法を行ったからこそできたことなのではないかと感じた。高校の授業と大きく変わり、先生からの一方的な授業ではなく、自分で意見を持ち、それを発表する。また、ほかの人の意見を聞き、自分の意見と比較する。

この繰り返しにより、自分の意見は変化していくと同時に、より良いものへと変化していく。このような授業がすごく大事なのだと感じさせられた。

その前のアクティヴ・ラーニングでも学んだように、教師の話聞くだけでなく、自分たちも積極的に意見を述べ、「主体的、対話的で深い学び」へとしていくべきだと感じた。大きさだが、これからの日本の発展のためにもこのような学びを小さい時から取り入れていき、大きくなったらこのような学びが当たり前となるような環境を作っていくべきだと考える。

自分自身も、自ら学びに積極的に取り組み、より良い学びを作っていきたいと感じた。

〈コメント〉

話し合いを繰り返す中で、次第に自分の中で変わってゆくものを体験していることが、具体的に述べられていて、わかりやすい。

(18 女性) 『臨床力を高めるための感性教育』を読んで考える自分の体験の意味

基礎演習では、何度もレポートを作成して、それを発表した。繰り返していくうちに、自分で考えたり、先生や他の生徒の発表を聞いたりして、たくさんの新しい発見があった。また、自分自身、成長できたと感じる。

まず、発表するということが少しだけ慣れることができた。私は人前で発表することが苦手だ。自分の番が近づくと、緊張してしまう。特に、自分の意見を発表するとなると、自分の意見がみんなの意見と全く違っていたらどうしようと思い、不安になる。しかし、今回の基礎演習では、一人一人、発表の後に、先生が肯定的なアドバイスや新しい疑問を投げかけてくださったため、自信がついた。私の考えは間違っていないのだと感じ、嬉しかった。しかし、自信はついたが、自分から積極的に意見を言うことはまだできない。順番に発表したり、名前を呼んで当てられたりしなくては、まだまだ発言できないのが現実だ。

次に、自分には語彙力が足りないと感じた。自分の考えをうまく言葉で表すことができない。前回の授業の際の、『火花』の著者の又吉さんの話が印象に

残っている⁴。又吉さんは、今までうまく言葉にできなかった感情が、ある本を読んで言葉となっていたのを見たとき、小説の面白さを感じ、小説を書き始めたそうだ。私もそのようなことが何度かある。話しているときにも何度かあるが、本を読んでいるときのほうが感動は大きく、印象に残る。伝えたいことを全く同じように伝わるようにするためには、語彙力がとても大切だと思った。似たような言葉でも違うニュアンスのある言葉はたくさんある。勉強しなければならなかったと感じた。

そして、男児のビデオの観察の解説と、『臨床力を高めるための感性教育』を読んで、さらに感じたことが、人間の一つ一つの動作や言葉、目の動きにまで、意味があるということだ。すべて、感情が基盤となっている。先生の解説では、一つ一つの動作に注目して観察していた。そこまで細かい観察ができるのだなと思い、驚いた。母親が手を腰に当てるしぐさや、子どもの一瞬の表情など、なんでもなさそうな動きにもすべて意味があった。繊細な心の動きは体の動きに反映される、その通りだなと思った。新しい発見だった。

基礎演習では、レポート課題のあった日は毎回一人ずつ発表したの、たくさん意見の聞くことができた。レポートの書き方も勉強になった。論理的に書くのがうまい人や、細かいところに注目している人、おもしろい考えの人など、いろいろなひとの発表を聞くことで勉強になった。特に、二つに分かれて発表した時には、アクティヴ・ラーニングのように、意見を言い合ったこともあり、良い経験になった。これから大学で4年間を過ごすわけだが、レポートを書くことに慣れることができたことと、アクティヴ・ラーニングについて学ぶことができたことと、人前での発表に少し慣れることができたことはとても良い勉強になった。レポート課題は大変なこともあったが、基礎演習という科目名の通り、大学生として学ぶために必要なことを学ぶことができたと思う。

⁴ 芥川賞を受賞した又吉直樹が、あるインタビュー番組（TBS系列で毎週土曜日朝放映されている「佐和子の朝」）で、自分が作家を志すようになったきっかけを以下のように述べていたことを私が紹介したことを指す。彼は若い頃悶々としたある思いを抱いていたが、芥川龍之介の小説『トロロク』を読んでいて、その思いがじつに的確に表現されている箇所気づき、感動したことだという。

〈コメント〉

この学生の体験談には、他の学生では取り上げなかった重要なことが述べられている。「人間の一つ一つの動作や言葉、目の動きにまで、意味があるということ」である。このことはこの学生の今後の人間観察力を養う意味で、大きな気づきとなると思う。

(19 女性)「これまでの授業の感想」

基礎演習を受けて、ここまで自分の意見を深め、人の前で発表することは初めてだった。今までの授業では何人かの人だけの意見を聞き、自分もどう思ったかなど意見を出して深めるという授業だった。そのため人の前で発表することが少なく、このような授業形態は初めてだった。また自分の意見をまとめるだけでなく、みんなの意見を聞いた上で自分の意見をまとめるということもした。人の意見を聞くときも、ただ意見を聞くのではなく、自分では観察できていなかった点などを聞き、さらに自分の中で意見を深めるということも学んだ。今まではただ他人の意見を聞くだけで、自分の意見と比較することや、さらに考えを深めることをしなかった。だがこの授業で自分の意見とみんなの意見を比較したりすることで、自分の考えがさらに広くなったり、より理解することにつながったと思う。

今まで受けてきた授業では、ひとつの話題に絞りそれについて何度もみんなで意見を出し合うということはありませんでした。また自分の意見を言うという機会も少なく、受動的な態度での授業が多かった。そのためこの授業方法は最初とても戸惑った。今まで自分の意見を言うことが少なかったため、人前で発言するということにも抵抗があった。しかしこの授業では、人前で発言することは恥ずかしいことではない、自分の考えを伝え、多くのことを学ぶことができる大切な機会だということも学んだ。

(20 女性)「基礎演習の総括」

今回の基礎演習は、自分自身の物事の見方を知る良いきっかけとなりました。私は出された問いに対して正しい答えは何か、他人と違う答えにならない

ようにするにはどうしたらよいかということばかり考えていたことに気づきました。それは自分の考えをありのままに述べているというよりは、他人と同じ考えを持っているということに安心し、自己満足しているだけだと気づきました。自分の意見を持ち、述べていくことが大事だと思いました。様々な人がいるため、自分の意見が否定されることもあると思います。しかし、自分がなぜそのように考えたのか、しっかりと根拠を持ち、相手に説明することができるのであれば、それは自分の考えとして持っていていいと思います。自分の意見に根拠をつけてしっかり述べ、なおかつ相手の意見も取り入れていく、そうすることによって、より深い学びになるのではないのでしょうか。

また、こうと思い込んでしまったり、先入観を持って物事を考えてしまったりすると、柔軟な考え方が出来なくなってしまうことがわかりました。推測して物事を考えていくことは大切なことであるけれど、先入観を持つことや決めつけてしまうことはよくないと思いました。このことは、社会福祉の専門職においても、大切なことであると思います。相談者の第一印象でこの人はこういう人だと決めつけてしまったり、母子家庭だから生活に困っているのだろうなどといった先入観を持って相談に応じていたりすると、相談者が本当に必要としていることを見過ごしてしまい、質の高い援助が出来なくなってしまうかもしれません。

以上のことから、私は今回の基礎演習を通して、他人に合わせた考えかたをせず、自分の意見（考え）を強く持つことの大切さ、先入観を持ったり、こうと決めつけたりすることなく物事を見ていく大切さを学びました。この学びはこれからの大学生活や社会人になってから役立つと思うので、生かしていきたいです。

〈コメント〉

「先入観を持って物事を考えてしまう」自分に気づくことによって、「自分自身の物事の考え方を知る良いきっかけとなった」ことが語られている。

(21 男性) 「2つの討論から考えるアクティヴ・ラーニングの理想」

自分は、『臨床力を高めるための感性教育』を読んでいくつかの点で自分た

ちの討論の進め方と資料に掲載されていた討論の進め方に異なる点があるなど思った。

まず、4つの大学でのそれぞれの討論を読んで思ったことは、討論に参加している人の数が、自分たちの討論では20人近くいたのに対して、本では2分の1や3分の1ぐらいの人数で討論しているなどと思った。まず、自分たちの討論の進め方のように大人数でやる方法があると思う。順番に個人が映像を見て感じたことを一人ずつ発表していくやり方だった。メリットとしては、20人近くの人がそれぞれ意見を言うため、自分では観ても気づかずに見逃してしまっていたところや、違和感を持たなかったシーンに対して人の意見を聞いていく上で新しい疑問に自分で気づけるところだと思います。しかし、デメリットとして、人数が多いためどうしても時間がかかりすぎてしまい、時間が制限されてしまうので、人の意見を聞いた上での自分の意見を言うための時間がどうしても短くなってしまふところだと思います。実際に、自分たちの授業でも最初の方の半分に分かれての発表の際より時間が足りず少しオーバーしてしまったりバタバタになってしまった回もありました。また、本来は発表後に自分たちで出来るのが理想なのであるのだろうけど、先生がレポートの発表で気になった点をたまに聞いてどういう考えでそう思ったのかなど疑問を投げかけていました。その部分を学生同士が出来るようになっていくことで、1つ目のアクティヴ・ラーニングになっていくのではないかなと思う。

次に研究討論の進め方のように少人数でやる方法もあると思う。このやり方のメリットとしては、個人個人の意見を言った後にしっかりと討論する時間を設けることができ、より深く人の意見や考え方を理解し話し合いをすることが出来るところだと思う。しかしデメリットとして、考えがバラバラの際はうまくいくと思うが、考えが似てしまうことが大人数でやる際に比べると、増えてしまい、自分では考えもつかなかった新しい発想に出会えず、一つの方向だけに向かってしまうことがおそらく出てきてしまうと思う。また、話が一度止まってしまうと立て直すのが難しくなり、あまり中身の無い話し合いになる可能性もあると思う。だから、大人数での討論か少人数での討論どちらがいいのかは、なかなか答えが出てこないし、とても難しい問題だと思う。この話は、アク

ティヴ・ラーニングの授業をする際にも同じことがいえると思う。今回この簡単なアクティヴ・ラーニングの授業で、実際に自分たちでやることによって、もし仮に今後日本の教育にアクティヴ・ラーニング導入することになった際に壁となるであろう1つの課題になると思った。

この授業を通してあまり高校時代には自分の考えを周りの人に発表するということがなく、最初はとても嫌だと思っていたけど、今後社会に出て行く上で、自分の意見・考えを周りの人に伝えることは絶対にしっかりと身につけなければいけないことだと思ったし、その練習が1年生のうちから出来てよかった。

6. 考察

(1) 自分の感じたことを率直に語ることへの恐れ

— 「正解か否か」へのとらわれ

今回初めて入学直後の大学生を対象に「感性教育」を実施したが、予想されてはいたとはいえ、これほどまでに自分の感じたことを率直に語ることに對する恐れが強いは正直思わなかった。ほとんどすべての学生が異口同音にそのことを率直に述べている。彼らがこれまでどのような教育を受けてきたかを想像すると、私の危機感はより深刻なものになった。

ある学生(02女性)が自分で発表した後、思わず発したことばに、彼らが日頃から抱えている恐れが率直に語られている。「すみません。思ったことをそのまま書いてしまって。前に読み上げた人との書いた内容の雰囲気あまりにも違うものでつい……」である。私は思わず「思ったことをそのまま書くことが感想だよ」と応じたのだが、このことが彼女にとっては「この体験は私にとってとても衝撃的なことだった」というのだ。そして、彼女は「思ったことをそのまま書くことが感想であるという当たり前なことを頭では理解していたにもかかわらず、無意識に人の感想と自分のそれとを比較し、正しいかどうか気にしていたことを体感したからである」ということに気づくことができたという。今の学生の大半の「自分の感じたことを率直に語ることへの恐れ」は無意識化しているほどに根が深いものになっているということである。

今後、彼らの「自分の感じたことを率直に語ることへの恐れ」をいかに緩和

し、「自分の感じたことを率直に発言することが喜びになる」ように転化していくか、今の教育に求められている喫緊の課題であることは間違いない。

(2) 先入観へのとらわれへの気づき

つぎに明らかになったのは、「自分の感じたことを率直に語ることへの恐れ」を抱く彼らがそれに対して身につけた対処法の多くが「先入観をもって観察する」という態度だということである。さらに注目すべきは、このような先入観をどのように身につけたかということである。その多くがこれまでの教育に依っていることが推測されるからである。

現実の事象そのものを前にして何を感じ、何を考えていくか、そのような思考こそが生きる力となるはずである。それにもかかわらず、彼らの多くが知識だけを鵜呑みして、それをもとに外界の事象を観察し、自分の先入観をもとに理解しようとするのだ。

このような現実を知らされたとき、私たち教育する者は自らの教育の内実を振り返らずにはいられないはずである。このような現実は、教育する者自身にも同様に当てはまることではなかろうかと危惧される。なぜなら、長年指導する側に立っている専門家を対象に「感性教育」を実施すると、そのことが露呈することが少なくないからである（小林、2018c）

(3) 自分の感じたことを率直に発言する喜び

以上の点からすれば、ある女子学生（04女性）が「否定されることはなく、私の意見を受け入れてもらい、回数を重ねるごとに確実に人前で話すことに慣れることができたと思う。きっと皆もそうであったと思うし、皆の発言がどんどん活発になったように感じた」と述べているように、今回の「感性教育」は回数が限られていた割には、彼らの不安を一定程度軽減するとともに、多少なりとも彼らは「自分の感じたことを率直に発言することの喜び」を体験できたのではないか。

「小林先生に尋ねられるのが書いてきたものを読むのでは無いためとても緊張したし、当てられるのが正直嫌だった。しかし、その状況に慣れたのか、ど

んどん平気になって、最後には自分の感じたことを発言したくなり、家に帰ってすぐ次の課題に取り組むようになった。この授業を通して人前で発言することに慣れるだけでなく、振り返りなどをすることで自分の癖に気づくことができた」という彼女の体験談はまさに「感性教育」の目指していることそのものを如実に示しているからである。

(4) 自分に内在するアンビヴァレンスへの気づきの萌芽が認められる

前回（小林、2018b）同じく1年生ではあったが多数例を対象に試みた時、「様々な角度、視点から捉えることの面白みや喜び」を経験した学生は多かったが、対話を実施することができなかつたがゆえに、自己理解という面ではほとんど深めることはできなかつた。

その点で今回の試みでは、何人かの学生が自分自身の内的変化を率直に述べていて、注目に値する。

ある女子学生（07 女性）は『『みんな違ってみんないい』というフレーズをよく耳にする。頭では理解していて肯定的に捉えてはいたが、私は反対の『みんなと同じ』ことに安心し、そうでないと不安を感じていた。（頭で）理解していることと感覚が矛盾していた』と述べている。彼女が抱いている不安こそまさにアンビヴァレンスそのものであるが、そのことを彼女は自分のなかにある矛盾として気づいている。

21名というかなり多い人数での「感性教育」であったため、対話の時間は限られていたにもかかわらず、さらにこの学生は「その矛盾が無くなってすっきりできる可能性を感じる事が出来た」とまで述べている。

本来、アンビヴァレンスは誰にでも備わっている心性で、「感性教育」ではそれを無くすことが目標ではなく、それに気づくことである。しかし、この学生はそこに問題意識が向いていること自体に大きな意味がある。ここに今回の「感性教育」の試みの可能性を感じ取ることができるのではなかろうか。

おわりに

先日、NHK 総合テレビ番組「ザ・プロフェッショナル 仕事の流儀」（2018

年9月17日月曜日)で「プロフェッショナル子ども大学」という企画が放映された。小学生を対象に、「世の中の人があつと驚くスナック菓子をつくろう!」をテーマに、仕事の面白さと奥深さを経験させようとの試みであった。そこで講師を務めたのが商品開発の伝説的なヒットメーカー佐藤章氏(当時59歳)であった。彼はキンピールをはじめとするいくつかの企業の商品開発でつぎつぎにヒット商品を生み出してきた人物としてよく知られている。

私はいつも録画して必ず見る番組のひとつであったのですが、彼が子どもたちに商品開発の極意ともいえる信条をいくつか語っていたのがとても印象深かった。その要点を一言でいえば、「自分にウソをつかない」ということであった。何か新しい商品を生み出そうとして考える際にそれが最も大切なことだという。その意を、彼はことばを換えて、「自分の心が動くかどうか大切である」、「自分の生まれてから今日までの経験の中に(自分が生み出したいものの)“好き”がある」という。また「自分の心の中にしか正解はない」、「ウソのない思いにこそ熱は宿る」ともいう。要は、誰かの評判を聞いたり、アンケートをとって多くの人の好みを聞いたりしても、そのなかから「世の中の人があつと驚くようなものは生まれぬ」というのだ。自分の過去の経験を素直に振り返るなかでしか自分独自のものは生み出せないと、確信に満ちたことばで語っていた。

佐藤氏の語りを聞いた私は、自分の臨床教育として位置付けている「感性教育」の目指すところとあまりにも通底するものがあったので、深く共鳴した。

早速、学生たちにも鑑賞してもらったが、彼らは、こぞって異口同音に、感動した、面白かった、などと評価していたが、私の教育との共通性について語ったものは誰一人としていなかった。

このようなことは大学での教育で常々感じていることである。頭で(表面的にはよくわかったふうに要領よく無難にまとめて語ることに長けている学生は少なくないが、そのどれひとつとして私の心に響くものがない。要領よくまとめる学習だけは身につけているけれども、自分の経験を振り返って、自分のそれと比較しながら深く考えるという学びを身につけている学生はほとんどいない。

私がいつも大切にしているのは、何を学ぶにしても、心底自分の心に届かないような理解は所詮単なる知識として消耗品のごとくすぐに忘れ去られる。そんな知識をいくら蓄積しても、それが本当の意味で生きる力とはならないということだ。

心底自分の心に届くような学びを体験すれば、他のいかなる体験であろうと、それぞれがどこかで必ず通底し、有機的に繋がりながら生きる力として蓄積されるのではなかろうか。そんなことを私はこれまで実感してきた。

その点からすれば、私が試みてきた「感性教育」は、アクティヴ・ラーニング、すなわち「主体的・対話的で深い学び」として位置付けることができよう。今回の試みは、多少なりとも手応えを味わうことができたが、私の目指す到達点に到るには、まだまだ長い道のりである。

願わくば、大学でアクティヴ・ラーニングを試行する上で、私の試みが一つの刺激剤となってほしいと思う。ただ、そのためには、教員自身にも厳しい変革が求められていることを自覚しなければならない。真の意味でのアクティヴ・ラーニングはわれわれに生きる上での厳しさと難しさ、そして生きる充実感を教えてくれるものだと思うからである。

文献

- 藤井千春 (2017). 子どもが「深い学び」を遂げるために—「この子」の意味世界の生成・発展を読む. 西南学院講座 in Tokyo 「アクティヴ・ラーニングの目指すもの—『深い学び』と『感性を磨く』— (臨床と哲学のあいだ Part 4)」配布資料、pp.12-40. ステーションカンファレンス東京、2017.11.3.
- 小林隆見 (2014). 「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム—「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて—. ミネルヴァ書房.
- 小林隆見 (2017a). 臨床力を高めるための感性教育 (研究叢書 No.42). 西南学院大学学術研究所. 非売品.
- 小林隆見 (2017b). 臨床家の感性を磨く—関係をみるということ—. 誠信書房.
- 小林隆見 (2017c). 臨床家の感性を磨く. 西南学院講座 in Tokyo 「アクティヴ・ラーニングの目指すもの—『深い学び』と『感性を磨く』— (臨床と哲学のあいだ Part 4)」配布資料、pp.42-60. ステーションカンファレンス東京、2017.11.3.
- 小林隆見 (2018a). なぜ「感性教育」は学生に深い自己洞察をもたらすか. 西南学院大学人間科学論集, 13(2), 215-243.
- 小林隆見 (2018b). なぜ多くの学生が母子間のアンビヴァレントな情動の動きを感じ取

- ることができないか—「感性教育」の新たな試み—. 西南学院大学人間科学論集, 14(1), 279-318.
- 小林隆兎 (2018c). 臨床家にとっての初期体験の重み. そだちの科学, 31, 96-98.
- 小林隆兎・西研 (編) (2015). 人間科学におけるエヴィデンスとは何か—現象学と実践をつなぐ—. 新曜社.

西南学院大学人間科学部社会福祉学科